

説

女

嫁がぬ人

東京大学

兌

259

25

094716-000-8

特11-531

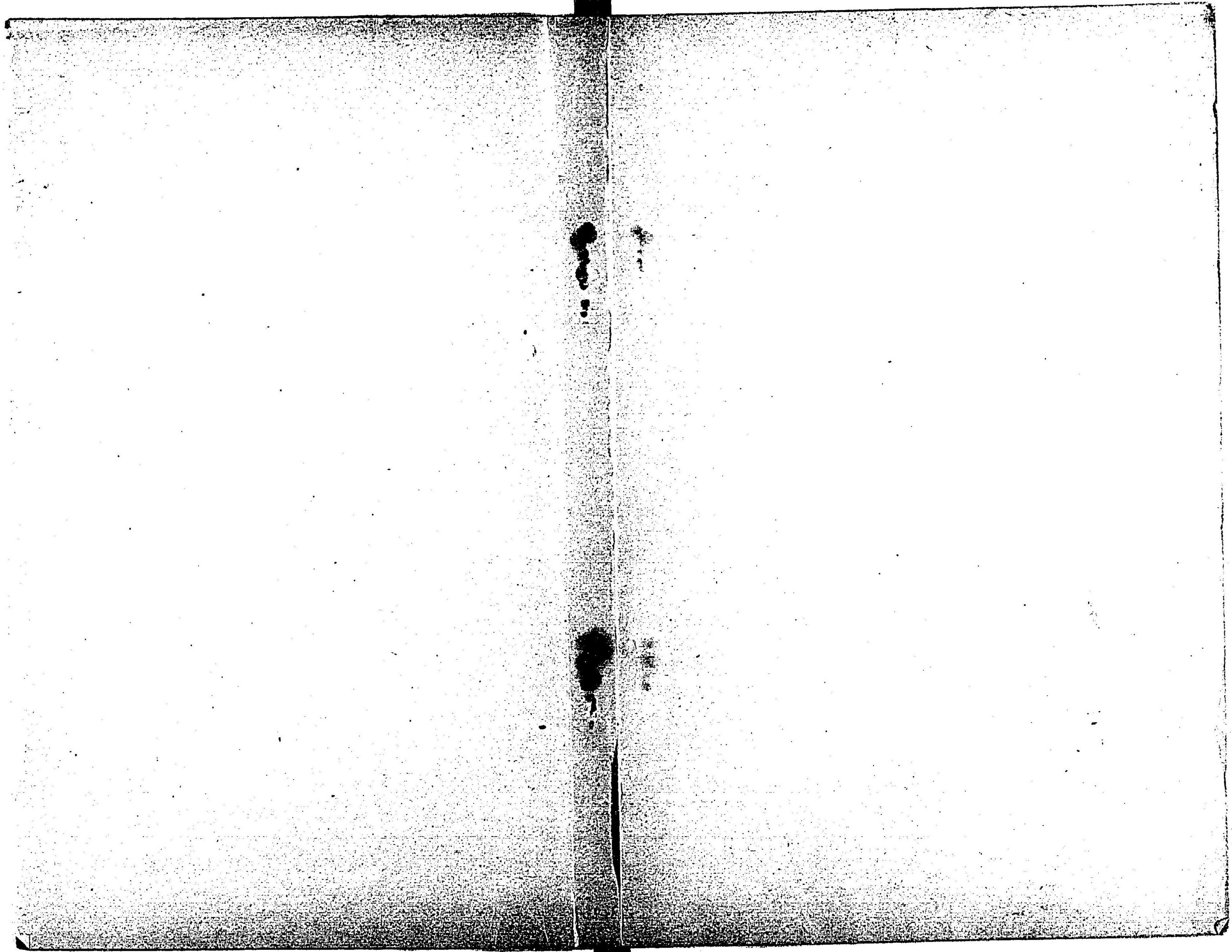
嫁がぬ人

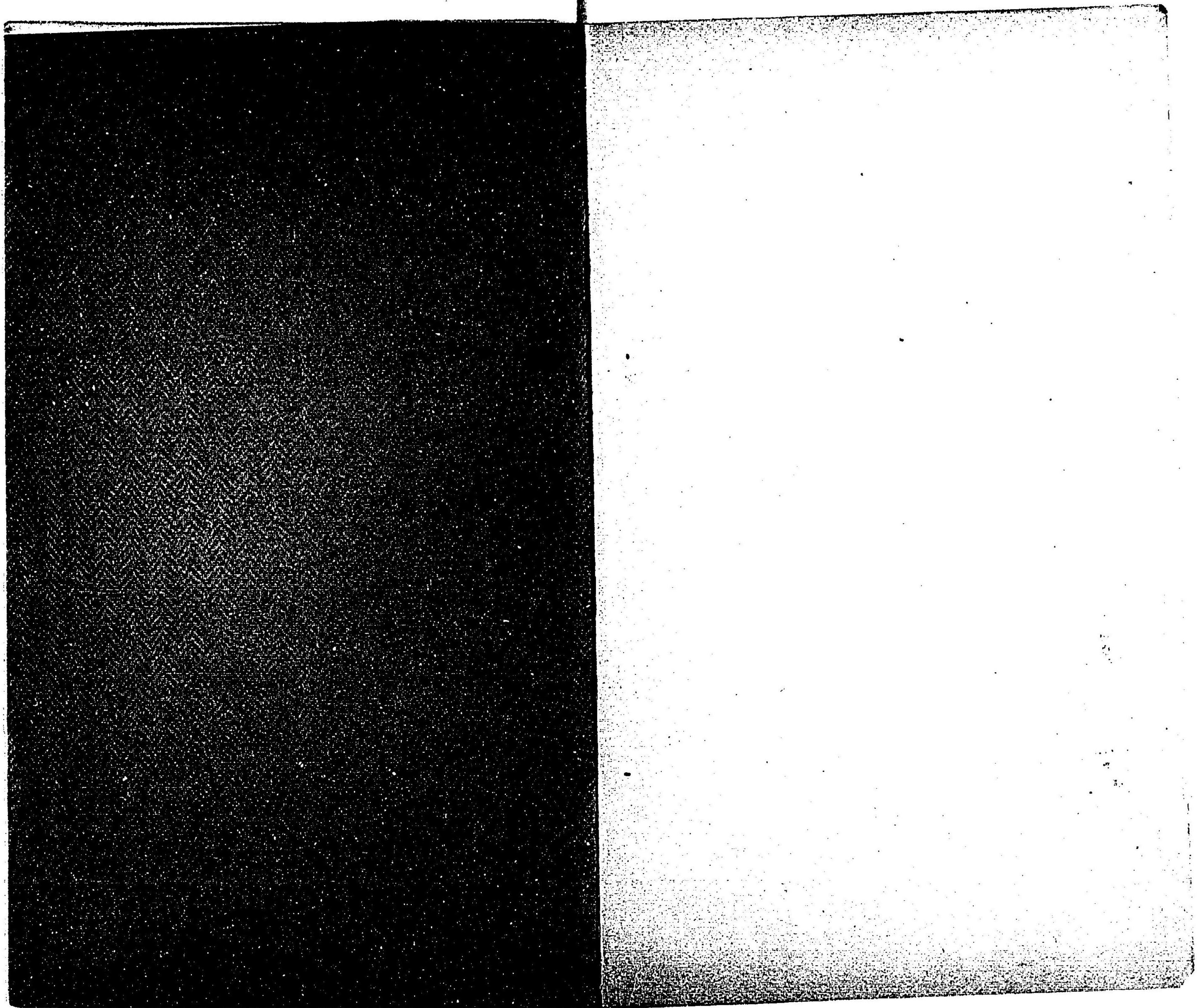
東水/著

M41

DBQ-2269







はしがき

日清戦争の際赫々たる武功を荷ひて、滿朝滿野の望みを一身に集めたる將軍あり。而かも痛むべし、一夜忽然として兇刃の下に斃る。曩に其の武功を賞へて止まざりし滿朝滿野の人は、皆其の兇漢の一日も早に發覺せしむる事を稱へて止まず。茲に花の如き令嬢あり、名をきみ子呼ぶ。きみ子は忽ち此の騒問の中心となりて、或ひは風に苦しむ、或ひは雨に悩み、遂にちりゆく花とあはれを共にしたり。而して令嬢逝いて幾何もあらず、偶然にも彼の兇漢發覺して久しく忘れられたりし事件は再び世人の注目を曳きぬ。事端複雑にして、中に腹黒き叔父あり、御用商人あり、戀を偽らんとする工學士あり。清き事玉の如き

明治
42 1 7
内交

目次

一	一場の惨劇	一
二	疑問!! 疑問!!	一七
三	戀の遺恨!	三三
四	腹黒き叔父	四三
五	五里霧中	六〇
六	後見は魂膽	六八
七	樂界の花	九六
八	人の噂	一〇二
九	戀の秘密	一二八
十	月の一夜	一三〇

少女、艶麗櫻の如き處女、皆此の事件を援けて活躍し來る。其の秘密の箱?、秘密の鍵を與ふるものは、即ち之れ此の一篇なり。

明治四十一年十一月

作者しるす

目 次 終

十一	云 <small>い</small> ひ得 <small>え</small> ぬ戀 <small>こ</small>	一四
十二	胸 <small>むね</small> の痛 <small>いた</small> み	一五
十三	哀 <small>あは</small> れ <small>の</small> 愁 <small>せう</small>	一六
十四	空 <small>そら</small> 前 <small>まへ</small> の大 <small>おほ</small> い戦 <small>いくさ</small>	一七
十五	臨 <small>ま</small> 終 <small>はら</small> の一言 <small>ひとこと</small>	一八
十六	秘 <small>ひ</small> 密 <small>みつ</small> の健 <small>けん</small>	一九



小説 嫁がぬ人

一場の惨劇

一場の惨劇!!

それは昨夕、午前一時から、同二時の間において、東京は牛込區、仲の町の、豫備陸軍中將、日高義方の邸内で起つた。

日高中將と云へば、日清の戦争には少將で、遼東半島に雄名をとるかした男である。これが、一夜の中に、惨憺たる横死を遂げて、而かも、夫人の濱子まで、おなじ刃の露と消え去つたのである。

今、事の顛末を次ぎに記るさねばならぬ。

東 水 作

日高の家庭は、主人中將、夫人瀧子、男二郎、姉きみ子、(長男一郎は、大尉で、日清戦争に従軍して、老虎尾山に戦死した)の四人、他に養生一人、下男二名、女中二人を合はして、都合九人の家内である。何と云つても武勳赫々たる日清戦役の猛將、世にたへられ、人に敬まはれて、入るにも、出づるにも、肩で風を斬る身分、九人の家族にしては、人数すくなく、さびしい位の廣い邸、その奥庭の、泉水を前にした、八疊、と、六疊つゞきの二室を、中將自らの居間と定めて、朝は早く起き出で、草花に水をやり、晝間は、骨董いぢりに、時々下男を對手にしては、快活な語調で、その品定めをして居る。

けふは、月のよい晩である。中將は、今、豫備の身の、餘りの氣樂さに、や、倦んだ身を、ツト庭に入れて、彼方此方と、夜露にさらめく、おぼらの花のかをりゆかしさを眺めてゐる。

此のとき、庭下駄のおともやさしう、父の跡をおつて来たのは、娘のきみ子、年は二十の今が花盛り、分けて、父のおもさし其のまゝを受けて、面長の、眼のすやしい、其の口元に、蓄の紅をふくんだやうなもの、一段美くしい。今年春、虎の門女學館を卒業して、才媛のはまれ高く、此の中將一家には、いやが上にも光りを添ふる、一名花とたへられてゐる。

近寄つてしとやかに。

「お父さま。ほんとに美しい花でございますね、月がかゝると、又一段ですこと。」

中將はしづかに願ひみて、

「おゝきみか、いつの間に出て来たのか。花も美しいが、月も美しいのう。」

と、千軍萬馬の間に、叱咤怒號した、さしもの中將も、子にはやさしい事象の如く、我が子ながらも、月に照り映ゆる姿の、見るからに神々しいばかり美しくしいのを見て、しづかに笑みをたへてゐる。

「さうですね、やつぱり、月と花と一緒だから可いんですね。」
と、きみ子は、その美しくい面を、父に向ける。

「さうぢやの、その月でおもい出したが、俺が、那の金州半島へ上陸したよきぢや、上つたときは丁度真夜半の一時ごろぢやつたが、暫らくすると、四邊が、うすぼんやりと明るくなつて、向ふの山々が、墨繪のやうに見えたでな、ハテナとおもつて、首をひねつて見ると、はるか背後の方の、自分の足下ともおもはれるところで、欠けた月が紅みをおびて、ほんやり掛かつてゐたのぢや。チト凄いやうちやつたが、其の景色がな、今に忘れないほど宜かつたのぢや。金州半島の月は、此の仲の町の、此の奥庭の月とは違つて、又格別ぢやて、ハハハハ。」
と、腹の底から、くづれるやうな笑ひこる。

「さうでございませうね。」
と、きみ子は父の傍のベンチに腰を下ろして、

「あんな廣いところで、さうして、那んな場合に御覽なすつたんだから、特別にさうお思ひなすつたんでせうね。でも、此の月だつて、ほんとに美しいんですわ。」

「それや、可いとも、ぢやが、金州半島の月には何うたか。」

と、わざとテラしたやうに云ふ。

「アラ、那んな事をお父様は。」

と、きみ子も笑ひながら、

「だつて、妻、金州のは見ないんですもの。」

「ぢやア、連れてツてやらうかな。」

「何處へ？」

「金州へさ。月見に。ハハハハ。」

と、又他愛も無い事を云つて笑つてゐる。

「お、やあだ、お父様は御冗談はツかし、金州ツて大變ですわ。」

と、きみ子も少しは、いやいで来る。折り柄庭石づたひに小間使ひが来た。小腰をか
がめて、

「アノ、旦那さま、奥様にお目にかゝりたいと申しまして、番町原田さんが、お
見えになりました、奥様は御病氣で御出で遊ばすと申し上げますと、それでは旦那
様にと申して、ござりますが、如何いたしませう」。

と、腰紐にいふ。

「番町原田が、今頃？」

と、云つて、中將は、しばし小首を傾けてゐたが。

「よろしい、座敷へ通しておけ」。

と、命ずる。小間使が去つた後でも、中將は、きみ子を對手にしばらくは、金州の月
の談しをしてゐたが、やがて、やをら立つて座敷の方へ行つた。

あとには、きみ子ひとり、とりのこされた所在なさに、唱歌を口誦さみながら、

花の間を又彼方此方と歩くのであつた。

座敷の方では、今しも中將が、客と云ふ番町原田と對して、何かしきりに話し
てゐる。此の原田と云ふは、中將とは同國出身の御用商人である。日清戦争のとき、
満洲の野で貯はえた金で今は何不自由なく暮らしてゐる。日清戦役の當時までは、
能く日高の家へ出入りしたものであるが、近來、腹工合ひのよくなると共に、餘り
面をも出さなかつたものが、此の夜に入つての來意は何事かと、中將は先づ不審し
ながら之れに會つて見ると、先づ久方ぶりの挨拶から、夫人病氣の見舞やら、さて
は四方山の空世辭まで平ぐものやうになつて振りまいて、さて語り出したのは餘の
儀では無い。きみ子が縁談の一件なので。

尤の此の縁談は、今から四五日前、日高の方で、寄らず障らず断つてあつたのを、
更に此の原田を通して申し込んで來たのである。先方は、前島と云ふ工學士で、去
年大學を出て、今は鐵道技師を勤めてゐる、此の話のあつたのはモウズット前で、

れよそ四十日も以前の事である。日高の家でも、無論、相當の婿でさへあれば、早く嫁を嫁げやうとおもつてたところで、斯ういふ話のあるのを幸ひ、いろく聞へて見たが、何うもおもはしくない點があつて、遂に一反断つてしまつたのである。

原田は、揉み手をしながら、

「わざわざ、斯うやつて出てまゐりまして、直接閣下にお目にかゝると申しますのも、へエ、實はその、出来る事なら、今一度お考へをねがひたいと、斯うおもひまして、へエ」

と、おそろく、煙草の烟を吹いて、

「尤も、斯ういふ縁談の事でごさりまするから、決して、無理には申されませんが、へエ、出来る事なら、そこを、何うとか、へエ、今一應御詮議を願ひたいやうな次第で」。

と、頭を下げる。中將は、唯だうなづくのみで、黙つて聞いてゐる。

「エ、其の、かう申し上げると何でございますが、エ、これは、たゞ媒介者の手前達で、熱心に申し上げてをるばかりではありませんで、實はその、當人の前島の方で、熱心に懇望してをるやうなわけで、へエ、其の成否にはかゝはらず、兎も角、今一應、御詮議していただき度いのでござりまする」。

中將は、此の時、その悠然たる身體を一ゆりゆつて、昵乎原田の面を見たが、やがて、ニコリと笑みをたへて、

「原田さん、御親切は、深く感謝しますちや、そんな娘でも、其のやうに云つて下さるのは、まことに、那れの幸福と云ふものぢや」。

と、朴訥な調子で、更に詞をつゞける。

「ぢやがのう、原田さん、此の縁談ちうやつは、頗る六ヶしいやつでな。何うもおもふ様に可かんわえ」。

「ハア、それやアモウ、こればかりは、決して無理には申し上げられませんで……」

「そこでちやて原田さん。先日も、奥から、あんたぢやアなかつたが、媒介者に言つておいたやうな都合でな。まだ娘は、しばらく、何處へも嫁かないちうでの、こればかりは親の権力でもいたし方が無いぢや。ハハハハハ」と、無難作に笑つた。

「へへ……、御道理でござりまする。でございませうが、そこをその、今少し……」
「イヤ原田さん、こればかりは駄目ぢや詮議しやうとは、いくらでも言はうがな肝腎の本人が承知しないでは、とても駄目ぢやろうよ。」

此のとき、庭の隅、座敷の外側に人影あり。月の光りに氣を留めながら、此の二人のはなしに耳を澄ましてゐる。それはさみ子なので。

さみ子は、父の去つた後の所在なきに、花の間を縫うて、氣をまぎらしてゐたが、モウ早や三十分も経つたのに、再び父のすがたの見えぬのに、ツイ足は座敷の方へ向いて、いつしか、座敷の中の二人の姿の、かすかに見えるところへまで行つた。

向ふの離れでは、弟の二郎が、今友人と共に、ヅキオリンの合奏をしてゐる、鷹を絞るやうな糸の響きが、林間をぬうて来る。

さみ子は茲へ来て、其のヅキオリンの響きに耳をすましてゐると、聞くともなしに座敷の話が、吐絶れ〜に耳に入る。それには、さみ子とか、お嬢さんとか云ふ詞が、處々に交つて聞えるので、ハテナとおもへば、われにもあらず足は其の方にはこぼれて、植込みの間へ身を沈ませたのである。

話はたしかに我が身の上、しかも縁談の事とすぐにも分つて、おもはず、面を紅くしたが、さるにても先方は、誰れであらうと、耳を澄ましてゐると、話の間に前島といふのが聞える。さても前島とは誰れ乎と、あれ乎、これ乎と、おもひを駛せて見た。ハタとおもひあたるのは、去年の夏の大磯の別荘である。

去年の夏、大磯の別荘に暫し休らうてゐたとき、濱で出會うた學校友人の伴れの男子で、前島秀雄といふのがゐた濱ではそれつ切り、詞を交す事も、往き來をする

事も、その後出會ふ事もなかつたが、都に返つてから二度ばかり繪葉書を呉れた。此方よりは云ふまでもなく、そのまゝにして打つ捨てておいたら、三度目には、女の前名で、封状を寄越した。開き見たきみ子は、たちまち、之れを寸断くんに引きさいて捨てた。其の後尙ほ一回手紙が来たが、今度は見もせず、焼いて了つて。虎の門への途中、何處かで、二度ばかり、其のすがたを見かけたやうであるが、さうをもふと、すぐ方向を更へて、電車に乗つたり、車に乗つたりして、之れを避けたので、途中で真正面に出會つた事は無かつた——其の男に違ひない、とおもつて、きみ子は胸もふさがるやうなおもひがした。

それにしても、父の詞では、それを断つてゐるらしい、とおもつて聞いてゐると、外に立ち聞く人のありとも知らず、中將は更に詞をついた。

「ハハ、ハハ、何しろ本人が進まないぢやから、お氣の毒ぢやが、原田さん、又改ためてお世話を頼みますよ、今度の事は、どうか悪くおもはないで下さい」

「ヘエ、まことに何うも、そのやうに仰しやられると、却つて手前の方で痛み入りまするで、兎に角、それでは、先方へ此の事を申しまするでござりませう。ヘエ何とも早や残念至極で、ヘエ」。

と、壁へ頭を擦りつける。

「どうか、角立たぬやうに、よく話して貰ひたい。原田さん、此の後とも頼みますぞ」。

と、中將は、武辯ではあるが、情のこもつたこゑで斯う言つた。

きみ子は始終の話を聞いてゐて、不審におもつたのは、本人が進まないからといふの一事である。まだきみ子はこれに就いて何等の相談をも、話をも受けた事が無い。それに本人が進まないからとは何うした事であらうとおもひながらしづかに又、奥庭の方へ歩みを移すのであつた。

きみ子の不審も無理では無い。全く今度の事は、父と母とで、相談をして、また

きみ子には何事をも話さないうちに断つて了つたのである。調べて見ると前島秀雄は、媒介者の話の通り學業成績は上の部類で、鐵道技師としても有爲の才物として認められてゐる、それに家には父と母と、たゞ一人の弟とあつて、別にこれといふ係累のないのも事實、其の上、家は岡山縣下の所謂舊家で、父祖は代々土地の代官をも勤めたものだ、これ丈けならば何不足はないが、唯だ一つ大きな疵の隠すことの出来ないのがある。

前島には、獨りの許嫁があつた。同郷同村のものであるが、既に一度前島の家へ來てゐた事がある。それは去年、前島が大學を卒業して國に歸つたときの事で、兎に角假り祝言まですませて、父も母も、打ちくつるいで、よろこんだのである、がそれは、ほんの時の間、前島は、何う云ふものか、此の花嫁を捨て、了つた、否や、むしろ、之れを捨てるが爲めに、辛らく／＼當つたのである。居る事四十日、強ひて東京へ來たが、父母にこそ折々の手紙はやるが、おのが妻には何のたよりをもせぬ。妻は嘆きのあまり病ひを發して、いたく胸に痛みをおぼえるやうになつた。前島はこれを見て、時こそ來たれと云はぬばかりに打ちよるこんで、病婦を離縁しやうとした。けれども、父や母は、村人の手前、さうもしかね。かつは、いたはしい病婦のすがたを、まのあたり見ては、あはれを催はしていつまでも家に留めやうとおもつたが、嫁の方から夫の仕打を怨んで、一先づ引き取る事となつた。

家に引きとられてからも、病婦は、始終悲しみ嘆いたのである。が、前島はたゞ一回、見舞ひの手紙をも寄越さぬのみか、父母が、病婦の家を見舞ふのに對してさへ、はるかに、之れを拒んで來たのである。

今年になつて病ひ益々わるく、つひに四月半旬、散りゆく花とともに、心臓摩痺で、怨みを呑みながら歸らぬ人の數に入つた。村人等は誰れ一人其の死を痛まぬものはない代りに、前島秀雄の薄情なる所爲を憎まぬものはなかつた。——何でも、秀雄には、東京に美しい女があつて、それが爲めに、此の、罪の無い、世間しらすの、

可愛い女を捨て殺ろしにしたのだと、葬式のあつた日まで、狭い村の、隅から、隅まで頻りに風評があつた。

それは兎に角、此の死んだ報知が、秀雄の許に達すると、さすがの秀雄も、此の時は何とおもつたものか、はがきで悔み状を寄越した、けれども病婦の家ではそれを受け附けなかつた。たゞちにそれを封筒に入れて、何等かの門違ひでせうといふ文句を添へて、秀雄の許へ送り返してやつた。——之れが又村の風評に上つて、其の所爲を快よしとおもはぬものはなかつた。

それは、つひ先月の事で、前島が日高の家へ縁談を申し込んで来たときは、すぐ其の後幾何をも経過せぬのであつた。

日高中將が、或る人からこれを知ったときは、さすがの將軍も舌を捲いて、今の青年の、薄情なのと、厚顔なのとに打ちおどろいた。仁義忠孝を以て、おのれの主義とする日高將軍は、前島の義理をも情義をも辨まへぬ所爲を聞いて、さながら蛇

蝎の如くにおもつた。たとへ、學問あり、才幹あらうとも、其の品性が斯ういふ男なら、もはや詮議するまでも無いと云ふので、むろん、さみ子に話すにも至らずして断つて了つたのである。

原田が歸つてから、中將は又庭に下りて来た。そしてさみ子を傍へおいて、例の快活な調子で、いろ／＼の話をしたが、原田との用件については一言も云はなかつた。

いつしか、夜は更けしとおぼしく、月影暗く樹がくれて、風さへソヨ／＼と吹き出でた。
日高一家に、大椿事の演せられたのは、此の夜、真夜半の出来事である!!

二 疑問!! 疑問!!

昔は江戸八百八町、今は、東京千幾百町を照す月の光りも、こゝ牛込は仲の町

日高庭内の樹深き中まではさゝす。その薄くらがりの間に身をひそめて、庭木の下を忍び音に、裏庭の方へ伺がひ寄る曲物、月影小暗く定かには見え分かぬが、淺黄の布で面を包んだのが、しづかに寄つて、ピツタリ雨戸に身を添へた。暫らくは、其處で何事か、しきりに策を施こしてゐたが、見る／＼その雨戸に手をかけた、苦もなく之れを外して、ソツと座敷の中へ這入つたのである。夜は、いよ／＼更けて、今が人間界の眠入り時、午前一時の、虫の息さへ聞こえぬ時である。

曲物が身を忍ばせてから、や／＼半時ばかりは、何のひゞきも聞えぬ、何の音もせぬ。——とおもふ中に、バタリと云ふ響きがして、アツと云ふ聲が聞えた。

つゞいて「曲物」と云ふ、男の聲に、忽ちドタリと云ふ響きが交つた。やがて、女の叫び聲が聞える。

「人殺し」

「大變!!」

と云ふ、もの凄い聲が、廣い家の奥から洩れて来る。

其の瞬間、かの奥庭の、外づした雨戸の間から、ヒラリと身をおどらして、庭に飛び下りた黒影、電光の如く、身を樹蔭に入れて、掻き消すがごとく、何方へか去つて了つた。後は唯だ邸中の大騒動!!

廊下を走る足音が、彼方にも此方にも聞える、やがて、バタ／＼と云ふ足音が奥庭の方にきこえて、一人の下男が、彼の外づした雨戸のところへ来て、手にせる提灯を高くかざして向ふを見た。つゞいて後からも一人、これは六尺棒を手にして、追っかけて来て、

「ごいだ」

と叫びながら、ソツと庭に飛び下りた。他の一人もつゞいて飛び下りて、黙つたまんまで、二人心あたりを探してゐる。

奥には女の悲鳴が又さこえる。

「旦那様」

「奥様」

と云ふこえが引ツさりなしに聞える。

仲町の此の晩ほど、あはれにも、ものすごい晩は、未だかつて、無かつたのである。

邸中、一騒動さわいだ後で、ヤツと下男が駆けつけて、交番の巡査が息せき駆けつけて来たころは、もう彼れ是れ四時にも近かつた。

先づ玄関を登ると、すぐ左りが應接室で、其の隣りが八畳の衣装部屋、それに続いて廊下を廻ると、其處に、六畳の間が二ツ續いてゐて、向ふのに中將夫婦が寝み、此方方には、きみ子が寝む事となつてゐる。そして二郎は、いつでもずつと向ふに放れた、廊下つゞきの書齋に伏せるのであつた。

惨憺たるは、實に此のきみ子と、中將夫婦との寢室である。女中はきみ子と一室おいてすぐ隣りの四畳半に、書生は玄関の隣の三畳に、下男二人は、二郎の寝む書齋と、母室との間の建てましたの六畳に寝んでゐたが、其處には何等の變りも無い。

——たゞおどろくのは、中將夫婦ときみ子との室である。

只見る、二ツの六畳の間の襖は、二枚とも折れ外れて倒れた上に、俯伏しになつて血に染まつてゐるのは中將で、夜着も其まゝ、片手を袖口に當て、片膝立てたまゝで、背後より大袈裟に一刀を浴びて、そのまゝ息の根たえてゐるのは夫人のたま子である。そしてきみ子は、したゝか肩口を斬られて廊下の出口で悶絶して倒れてゐたのを、二郎や、書生や、女中や、下男が来て、よう／＼助け起して、介抱してゐる處である。

醒い血は、襖と云はず、天井と云はず、畳と云はず、廊下と云はず、パツとあたりには迸ばしツて、見るからに、身の毛もよだつばかりである。

巡査は、注意すべき件々を、一ツ／＼手帳にしるして、さて彼の廊下の、とり外された雨戸のところへ行つて、また仔細にこれを書きとめて、ツインと庭におりた、下男はおそろ／＼後から明かりを待って踪いてゆくと、巡査は、庭の彼方此方と見巡つて、一ツ／＼手帳に書きとめてゐたが、やがてまた這入つて来て、そのまゝ表の方へ出て行つた。

再び巡査が来て、そして検事が来て、屍体の検視が済み、家内のもの、訊問が終つたときは、もう彼れ是れ、朝の十時ごろであつた。

中將夫婦の屍骸を取り圍んで、家内一同、たゞ泣きの涙にくれた。分けてもさみ子は、おのれの痛手をも忘れて、さながら狂するばかりに嘆き苦しんだのであるが、さすがに重い傷を受けてゐる事として、あたりのもの、切なる勧めによつて、泣く泣く麹町のさる病院へ入る事となつた。二郎は、何と云つても男子、出づる涙を、かみしめて、甲斐／＼しくも立ち働らいてゐる。

遠縁、近縁のものは云ふにおよばず、日高中將が生則親しく交はつてゐたものや、恩顧をうけてゐたものは、此の不幸なる報道を得て、われ先きに駆け集つて来て、かなしむもの、泣くもの、額を鳩むるもの、葬式の準備にとりかゝるものなど、みなおもひ／＼に、力をいたし、心をつくしてゐる。かの御用商人の原田も来てゐる、中にも母方の伯母、父方の叔父は、最も二郎の力となつて、今や中將の一家を切りまはしてゐる。此の叔父と云ふのは、日高將軍には、實の弟であるが、心は將軍とは反對で、日清戦争の際には、中佐で軍に従ひ、戦争中大佐に昇進したが、戦役をはると、分捕品事件で、宜からの風聞を傳へられたが、兄中將の威望が、それかあらぬか、別に軍法會議に問はれる事もなく、たゞ豫備役に編入されて事なきを得た。そんな男であるから、中將とは意見の合はう筈なく、此の頃ではほとんど音信不通の有様になつてゐたのが、今度中將横死の報を聞いて、第一番に駆けつけて來たのである。

中將横死の日より三日目には、畏くも勅使日高邸に参向して、御見舞の品々を下賜された。こえて其の翌日、立ち并ぶ二ツの棺は、仲町の日高邸を出で、青山の墓地に送られた。儀仗兵の吹奏する喇叭のひびきには、あはれ幾萬の男女見送り人おぼえず、面に半巾を蔽ふに違もなかつた。分けて、おなじく不幸の白刃にかゝつて、重き痛手の爲め、むなしく麴町の病院にありて、此の葬ひの式にも連りえぬさみ子の心をおもひやるものは、そこにも亦、一入深き、かなしみの涙を絞るのであつた。おもへば、満身に赫々たる武勳を荷へる老將軍の最期こそ、げにいたましいものではある。

さるにても、事件の報道に機敏なるを以つて誇りとする都下の各新聞は、かの機事のあつた翌朝の新聞で、くわしく其の模様を載せて、それに犯罪者に關する、種々の想像説を附け加へてゐる。そして其の想像説は、もとより區々として取りとめも無い中に、之れが決して盜賊の所爲でないと言ふ事は、何の新聞も、みな一致し

てゐる。

ある新聞は、故中將の近親某が、其の財産を横領しやうが爲めに起つた犯罪であると云つて、暗に日高大佐を指し示してゐる。

ある新聞は、中將が今度、さる事情によりて、特に軍事的機密書類を調査してゐたから、之れに對する、他の密探の行爲であると云つて、ある事、無い事、書き并べて、實に此は國家問題である。此の犯人を一日も早く逮捕しなければ、吾人は枕を安うして眠ることも出家ぬといふやうな關子。

又或る新聞は、中將が殿正廉潔の人で、彼の日清戦争の當時から、更に戦後に及んで、御用商人の、不正行爲を、摘發した事があるから、それが爲め、今回の災厄を招いたのだと云つてゐる。

又、某新聞は、これ我が社獨特の記事也と云ふ、冒頭をおいて、さて何處で聞き込んだものか、彼の前島秀雄と結婚の一條をくわしく書いて、其の名前だけは略い

てあるがさみ子と前島とは、前から親しい関係のあつたものを、嚴正なる小川が強ひて、二人を割かしためたが爲めの、遺趣切りであると言ふ事が書いてあるのみならず、さみ子にとつて、最も痛ましいのは、さみ子が此の夜兇漢に強姦されたるが如く書いて、中將夫婦は、之れを助けん爲めに、あへなくも其の刃に伏したものだと言ふてあつた。

風評、とりぐ、いづれを眞とも定め難い!! 死人に口無し、中將夫婦は、既に息絶えて何の聞く可き術も無い。ひとりさみ子のみは、此の手が、りを得るが爲めに、最も大切の證人であるが、其の病床について聞くと、由ると、自分は、枕許の襖の開く音に眼を覺まして、ハツと頭を上げると、頬冠りをした大の男子が、刀を手に持つて衝つ立つてゐるのに、びつくりして聲も出でず、飛び起きて、廊下へ出やうとするところを斬られたが、そのまゝ、其處へ倒れて、女中に氣をつけられるまで、少しも父や母の、いたましい最期をも知らなかつたのだと言つて、詞も終ら

ず、ひた泣きに泣いてゐる。たゞそればかりでは、何等の手が、りともならぬ。

が、警視廳の方では、何しろ、この大事件に遭遇して、こゝぞ腕のためしどきと、刑事調査は、みな、四方に眼をくばり、八方に駈け廻はつて、その手が、りを得る事にとめてゐる。そして其の夜、其の場の様から推して、勿論これが、普通の強盗の所業でない事だけは疾くに確しかめてゐるが、さてそれにしてもその手がかり、まるで雲を掴むやうな間から、何うしてこれを引き出すことが出来やう。

葬式のあつた翌日、かの原田が召喚された。つゞいて前島も召喚されたが、兩人ともに無事放免された。

叔父の大佐も嫌疑者として、一反召喚されたが之れ又た、ちに放免された。それは平素兄中將と確執の間柄、殊には中將横死の夜、あだかも大佐が家を明けてゐた事を探知し得たからの嫌疑であつたが、此の夜は去る待合に、一夜を明かしたと云ふ事を白状して、さらに詮議の結果放免されたのであつた。

こゝに警察の手がかりは全く絶えたのである。都下の新聞は、筆を揃へて、その無能を嘲つてゐる。中にも大新聞を以て自任してゐる某紙は、みづから千圓の懸賞に由つて此の犯人を出さうとしてゐる。

刑事は血眼になつた。其の結果、こゝに一人の最も有力なる證據を持つた、犯人を擧げたのである。それは日頃、日高家に入出入りする、中井藤三郎といふ、植木職人だ。

この犯人が檢舉されると同時に、至るところで、種々の風評がおこつた。

「おい何うだい、日高の犯人が、捕まつたてえちやアねえか」。

と、樹蔭に息を入れて、たばこの烟りを吹いてゐる、一人の土方が云つた。それに應じて、向ふのが、

「アリヤアお前植木の職人だつてえよ。何でも日頃出入りしてやがツて、家の勝手もすつかり呑み込んでゐやアがツたさうだせ」。

と、これも、パツと煙草をくゆらす。

「それがお前悪人だね、人の云ふところに由ると、目的は嬢様で、これまで、久しく附け睨ツてゐたんだとす。お前、可哀さうなのは其の嬢様ぢやアねえか、身體を臺なしにされて、おまけに、手傷を負はされて、両親にも放れて了つたと來た日にや、全くやり切れないや」。

と、深く同情してゐる。と別の一人が、此方をふり向いた。

「ナーニお前、それや違ふせ、何でも日高の方ぢやア、飽くまでもそんな事は無いと言つてらあね。嬢様の斬られたのは、両親の斬られた後の事で、年も行かねえから、それまで、そんな騒動を知らずに寝込んでゐたてえんだよ。これやア全くだるう、お前、豊夫日高の嬢様が、それに、すぐ隣りの室には、中將まで寝てゐてよ。そんな事の出來ツこはねえや」。

と、これは、又何故か、しきりに、さみ子の辯護をする。

「とぼけるねえ」。

と、最初のが、腹立たしさうに、そして充分をかしみをを見せて、

「おいて呉れ、此奴、日高の嬢様の肩を持つてらあ、的切下心があるんだね。でも先方から、御断りだと云つてらあ。お前よりは、それでも餘つ程植木職の方がましだろうよ。ハ、ハ、ハ、」

「何だと、此畜生、冗談も大概にしろよ。なにが、お前、俺れつちが、日高の嬢様の肩を持つんだい」。

と、睨み返した。

「だつてお前、お前なア、頭から化されてるんだ。日高の嬢様ともあらうものが、よしんば、さういふ事があつたにしろ、お前、それを明らさまに、世間に云はれたもんぢやアねえ。そこが、お前考えものだよ。警視廳の方ぢやア、もう疾ツくに、的切それと見當を付けてると云ふぢやアねえか」。

話は尙ほ日高問題で、二言三言、何か云ひ争つてゐたが、やがて又各々立ち上がつて、鉞を上げて、えんやらやをやつてゐる。

が、此の風評は、こゝにゐる土方丈の風評ではない。未だ事は豫審中に屬するが故に、くわしい事は書いてないが、各新聞の雑報にもほゞこれと同様の事が記されてあつた。そして、中井藤三郎については、其の前科數犯ある事をするし、且つ之れまでも度々婦女子に危害を加へんとした事もありて、一種の色情狂であらうと云ふことをしるしてある。

豫審廷に於て、中井藤三郎が、何ういふ調べをうけたかは充分に分らぬが。兎に角日高の事變に關しては、存せぬ、知らぬの一點張りで、はじめ有力な證據とおもつてゐた事も、後には何の手が、りともならぬことになつて了つたらしい。が尙ほ他に犯罪の見込みがあるといふので、暫らく檢束して訊問を重ねてゐるが、之れもまだ要領を得ない。

が、更に聞くところによると、實は警視廳の方では、既に別に、眞の犯人と目するものに、見當を附けて、切々と其の方の證據を蒐めてゐるが、それを擧ぐるに至るまでは、行きがかり上、此の中井を檢束しておくといふ手段であるらしい。さても、今度擧げられんとする、眞の犯人は何者ぞ。地位あり、名譽ある人々此れには關連してゐるといふ話が、ほのかに傳へられる。

疑問!!。疑問!!。日高事件は、ますます粉料して來るやうすである。

三 戀の遺恨?

こゝは本郷區、根津權現の裏方にあたる、二階建ての一構へ、夜はモウ九時前後とおぼしく、初夏の外はまだ宵ながら、此の裏町は、ヒツソリ閑として、たゞはるかに車の軌音の、遠く微かに聞えるばかり。其の二階の一間に座を占めて、相對するは、主客たゞ二人、ひとりとは年の紀二十八九、色黒くして瘦形の、鼻下には、

お拵へ向きと云ふ、薄い形ばかりの髯を蓄へ、物を云ふときに、妙にその口許に、冷やかな笑ひの波を湛へる癖のある男、今ひとりとは年の紀五十前後、でつぶり肥つた身体を窮屈さうに、畏まつて、少し俯き加減に物をいふ癖がある。話はモウ大分前から引きつゝいてゐる。

甲語り、乙談じ、しばし吐絶へては又つゞき、時々、低い笑ひ聲さへ之れに交つて聞える。

およそ一時間ばかりは、何事とも分らず話してゐたが、やがて、二人はツと立ち上つた。これから何處かへ出かけやうと云ふのである。其の二人の立ち上つたとき、丁度、それと同時に、庭のくゞりを開いて、私と身を忍ばせたものがある。暗の夜の、黒い影は何物とも分らぬが、今二人が二階を下りて、路次へ出るのを見すまして、又しづかに、其のくゞりを出た、そして見えつ、隠つ、出で行く二人の跡を追ふのであつた。

二人は、門口から左の路次へ這入つて、それから本郷の通りへ向つたが、高等學校の前で、車を命じて、何方へか去る。後なる黒影も亦、ヒラリと車に乗つて、前なる車を、静かに追つてゐる。

こゝは、下谷伊豫紋の裏二階、八畳の座敷を陣取つて、相對するは、先刻根津から出て来た二人の客、藝者二人に、半玉一人を、傍にはんべらせて、呑めや歌へで騒いでゐる。年老つた方は、モウはや大分酔いが廻はつたと見えて、舌の呂律も怪しい。

「あゝコラ〜か」

と、自分の額をパチ〜叩いて、拍子を取つてゐる。間抜けた顔が、一段と間抜けて見える。

「ほんとに原田さんて面白い方だわ」

と、中年増は、お馴染らしく、氣のおけぬ風。

「あなたもチャお發しなさいよ」。

と、ひとりか、若いのを衝ツ突く。

「イヤハヤ、根つからまだお坊ツちやまでござりますた」。

と、原田は對手を見て、

「あなた、郷に従がへちや」。

と、杯をさして、

「一杯飲んで、ゆつくり十八番を聞かして貰ひませうかな。ね、おい、別嬪此の先生、これで都々逸の名人だよ。ハツハツ、」

と、又グツと飲む。

「アラさう、ちやア何卒ね。あなた、そんなにぢらすもんぢやアありませんよ。ねえ姉さん」。

「さうよ。そんなにちらさなくツたつて、拙なものは、拙ですからね、てな事おツしやいましたかね、おや失敬」。

と、口を噤んで笑つてゐる。

「姉さんは、ひどいわねえ」。

と、おしやくが口を突ツ込んで、

「あんなに云ふんだから、あなた一ツおやんならぬよ」。

と、若い方の肩を持つた。

「ヤア、梅ちゃんはお断がならんぞ」。

と、老爺はまた口を出して、

「サアサ、いよく前島さんの番ぢや」。

青年は實に前島秀雄である。そして此の對客は、他ならぬ御用商人原田であるのだ。彼等兩人が、何がゆるに、今夜こゝに相會したのかは、後に至つておのづから

明らかになる。

「おやんなさいよ、前島さん」

と、又中年増が、ひやかすやうにいふ。

「やるさ、さう侮辱されちやア、やらなまやアね」

と、杯をグツと干して、

「我が戀は——」

と、やツた。

「おやく、サノサ節だよ。不意打ちねえ」

と云ひながら、三味線の調子を合はして、

「さあ、やつて頂戴」

と、ペン／＼彈きはじめる。

「よしかな」。

と、だめを押して、濁つた拙いこゝろで、

「わが戀は——、

雲にかけ橋、かすみ千鳥」

「サイシヨネ」

と、みんなで囃す。

「どうせ會はれの戀なれば、

おもひ切りたいネ、忘れたい、

と云うてあきらめられもせず。」

又みんなで囃す。スルト今度は原田が、

「わが花は——」

と、やる。

「あの花だわ」

と、半玉が口を入れる。

「なめに、他のぢやアないよ。俺れの花だもの、アツハハハ、サアサ、弾いた弾いた」

と、調子に乗つて、

「わが花は——奇麗な花だが、

愛嬌が無いで——」

「おや——」

「もしも愛嬌があるなれば、

一花散らさずネ、床にさし、

ひとりで眺めて暮らしたい。」

と、其の大きな頭をふりたて、唄ふところは、まるでポンチ繪をつくりだ。

「原田さんは、全く喉が美しいわ」

と、ひとりが尤もらしくいふ。

「さうかい、これは有り難う、お前でなきやアね。」
と、眼尻を下げて。

「ア、キタコラ」

と、又唄ひはじめる。三人が一同に、ドツと噓し立てる。

「ほれたおもひを、岩うつ波の、

われからくだけて、ものおもひ。」

柄にもない歌を唄ふ。

「おつたわねえ。」

と、中年増がいふ。

「い、歌ねえ、全くだわ。」

と、ひとりがいふ。

「なか／＼これで、以て、原田さんは、隅っこへおかれなからね。」

「さうねえ、ちやア今度は前島さん、あなた元氣をお出しなさいよ。たつたつた、

田の中で、でもおやんなさいよ。」

と、前島をそののかす。

「よし来た」

と、今は、前島も大分酔ひが廻はつたと見えて、元氣よく、はしやいで来た。

かくて、尙ほ暫らくは、ドンチャン打ち騒いでゐたが、もう十二時にも近くなつ

て、二人は茲を切り上げて表へ出た。そして故意と池の端の方へ廻つて、辨天の處

を向ふへ突き切つて行うとする。

歩みながらに、語らひ行く話の模様、何か、密々の事と見えて、成るべく低聲に

はしてゐる様子であるが、原田の方は一層酔ひ泥れて、次第／＼に話の聲も高まッ

て来る。

「それぢやア前島さん、
と、酔歩蹠蹠としながら、

「俺しがお受けやいしましたからにやア、もう十が九分までは、此方のものではサ。

グープ」

と、酒臭い息を吐く。

「ヤ、どうも有り難う。甘く行きやア原田さん、お禮は、失禮ながら、お望み次第。

ハ、ハ、ハ」

「ナニ、何と云つたツて先方は五百萬圓からの財産でサ。日高なんぞとは段違ひ、

頭で格が違ひまさあね」。

と、酔眼に笑ひを含んで、

「女は美し、金はあり、加之向ふから来てをるとあツちやア、首尾は上吉、上々吉」

「だが、其のお母ツてえのが、そんなに云つてちやア何うだかね」。

「ナニ、高が女でサ。老爺が云と云やアそれツ切りでサ。本人が首ツ丈けと云やア、
老爺だツて、お母だツて、説き伏せるに譯があるもんですかい。日高を失敗つたに
ついちやア」

と、さすがに低聲になつた。極めてかすかで、よくも聞きとれぬが、

「……………腹癒せでサア」

と云つた聲のみは、かすかながらも、力強く四邊にひびいた。

暗雲空をとざして、暗い〜夜である。池の上を吹いて来る風、夜ふけては、肌
に染みるやうだ。

ふたりは尙ほも話しながら、いつしか東照宮の石段の下まで来た。

「ぢやア茲で別れるとしませうかな」。

と原田の聲。

「それぢやア失敬します」。

と、一寸句切ッて、

「萬事お頼みしましたよ」。

「よろしい、大丈夫、引き受けましたから」。

と、早や向ふへ行きかける。前島は東照宮の下を通つて根津へ歸ろうとし、原田は

不忍の池を一周して切り通しの方へ出やうとするのである。

原田は、前島に別れて、池の回を廻りながら、千鳥足の拍子をかしく、

「……………むかしを思ひいづのおくの、赤澤山のかりくらにて、父もうせさせたま

はずや。今とても狩り場とあらばなどしも、御心にも掛けざる……………」

と、小袖曾我の一節を、謠ひつゝも、心長閑に向かふへやつて行く。

其の静かな、暗き闇を縫うて、先きのほどより二人の跡を追うた黑影、并は今原

田とおなじく此の池の回を廻つて、何處までもくと、其の跡を追ッて行くのであ
つた。

四 腹黒き叔父

話は、こゝで一才前島と原田との關係におよばねばならぬ。

はじめ、前島と原田とは一面の識も無かつたのである。それが或る動機に由つて

極めて惛戀の間柄となつた。

その動機と言ふのは彼の結婚の一條である——前島の親しい人で中村と言ふのが
ある。之れは前島とは同郷の岡山縣で、嘗て陸軍省に技師として奉職してゐた事も
あり、かたゞ日高中將とも、知り合ひの間柄である。はじめ前島が、きみ子に對
する縁談を依頼したのは、此の中村技師であつた。ところが其の結果は餘り面白く
なかつたので、更に日高中將とは同郷で、かつては始終出入りしてゐた原田が、恰
かも中村の親しい間柄であるところから、一層これに頼んだならと言ふので、此の
相談を持つて行つたのであつた。それはつひに不成功に畢つたけれども、兩人の交

際は、全く茲にむすばれて、爾來互ひに往き來して、分けても親しく交はつてゐる。のみならず、二人は、その縁談の關係から、すでに一度、日高事件の嫌疑者として擧げられたほどである。

日高の椿事があつてから早や四十日、該事件の眞の犯人未だ捕まらずして、世は尙ほうれひの眉をひそめてをるの時、彼等二人の間には更に新らしい問題が持ち上つたのである。

原田は其の後、しきりに前島の家に入りして、曩きに日高で失なうた縁談を、別の方面で新に回復しやうと熱中した。先づ前島の意中を探つて見ると、必らずしも日高のさみ子と限られてはゐなかつた、殊に那いふ事變があつたために、勿論當分其のまゝに立ち消えて了ふべきである。原田はこれを確かめてから専心諸方に眼を配つた。

スルト、計らずも斯う言ふ事を耳にした。

それは前島自身の口からも、多少は洩れたが、主として中村技師の妻君の口から話された。のみならず、原田が早速向ふへ往つてそれとなく、其の様子を探つて、略ぼそれに相違ないと見當を附けたのである。

中村の妻君は、以前に立教女学校の教師であつた。其の數ある生徒の中には、時中村の家を訪づれるものがあつたが、其の間に、三宅房江といふのがあつた。これは分けて中村の妻君とは同國の、廣島縣の人で、今は下町でさる實業に手を出してゐる、資産家の末娘と、言ふので、他の生徒にも増して時々尋ねては來るし、中村の方でも、おのづから他のとは違つて親切にあしらつてゐた。其の頃丁度前島も技師とは同郷の好みまだ大學にゐたころとて、時々來ては、自分の家のやうにして遊んで行くのを常としてゐた。

前島には前言ツた如く、疾くに許嫁があつたので、別にこゝろを動かさなかつた——いや其の許嫁は兎も角も、あへて三宅房江に對しては、こゝろを動かさなかつ

たらしい。けれども、房江は、其の前島の、角帽姿に制服をつけて、自分の師匠と仰ぐ。中村先生の家で、何へだてなくつきあつてをるのを見て、おもはず床しい人だとおもつた。房江の小さい胸は、此の時、物のあはれをおぼえて時めいたのであつた。

が、さすがは處女子の、堪へぬおもひを心の礎には出さず、人知れぬあこがれに耽つておるのを、中村の妻君のみは、いつしかそれと悟つてゐたのである。

ことに、此の春、さる實業家から、縁談の申し込みがあつて、両親までは両手をあげて賛成したのを、房江の一存で、到頭破談にしてつたといふ事を聞いた。その癖時々中村へ来てはいつもの如くにたのしんでゐる。中村の妻君は之れ等を取り集めて原田に話したのである。原田は一も二もなく、承知して、早速先方を探つて見た。スルト、果して房江は、意味ありげの獨身論を主張してゐるといふ事であつた。

さらにくわしく探つて見ると、房江の姉は光子と言つて、先年さる法學士へ嫁いたが、其の時の持参金が三萬圓であつた。そして無論この妹、娘にもそれと同額の持参金を添へる筈だと言ふ事を聞いたのである。——原田はおもはず手を拍つてよろこんだ。いふまでもなく、原田には深き下心があるので、其の前島に盡くす忠勤は全く、花嫁の持参金の高と正比例してゐるのだ。

原田は裏きは下谷伊豫紋で前島と別れてから、切々と力をその方に注いで、縁談とり決めの爲めに大いに奔走した。はじめの中は、いろく面倒な事もあつたが、何しろ當人の娘が進んでゐるので、比較的にまとまりが早く、いつしか、父も母も、ツマリ家のものはみな承知して、唯だ此の上は親族のものに相談してといふままでに運んだ。——其の吐嗟の間に端なくも大事件が持ち上がったのである。

話はこゝで日高一家の上につらねばならぬ。

きのふまでは、廣き邸の中も、さして淋びしとおもはなかつたものが、今は、主

人二人をうしなひて、廣き邸内は、いやが上にも物さびしく、たゞ鼠のさわぐ音のみひとり賑はひをそへてゐる。

かなしき中にも、いつしか初七日のいとなみもすみ、十日経ち、二週間経ち二十日と次第に日敷を經る。

二郎は今年十九の血氣さかり、父母横死の様を見てこそ、身も世もあらぬまでに、痛み悲しんだ。もちろんまだ涙の跡の乾くはずはないが、それでも男ごころに、一日も早く犯人を擧げて、亡き親の妄執を晴らしたい、出来れば、その犯人の分り次第、目のあたり、寸断くに切り刻んで、充分怨みを報いたいとおもつてゐる。殊には、父母の横死と共に、姉きみ子が重傷を負ひしさへ心苦しいを、況して世間の口の葉にかゝりて、あらの風説をさへつたへらるゝを聞いて、たゞく齒を喰ひしはつて残念がった。そして、これから、其の不幸な姉を助けて、此の日高の家を背負つて行くべきものは、自分をおいて他に無いとおもへば、必おのづから奮ひ起ら

ざるを得なかつたのである。

きみ子は、其の後次第に傷所の痛みも柔き、熱發も段々減じて、丁度二十日目の夕方、尙ほ看護婦ひとり附きそひの上、きみ子の望みを叶へて、一先づその仲町のおのが邸へ歸つて來た。

歸つて來て見ると、かねて覺悟は、したものの、今更のやうに淋びしい邸の中を見るにつけ、又新しい悲しみを増して、嘆きの涙にくれるのであつた。きみ子の深き胸の痛みは如何なる時にか、とり消す事が出來よう。

看護婦は、きみ子があまりに嘆き悲しむを見て、又體に觸る事もあらんかと、あたりものを遠ざけて、靜かに寢床に休んでゐなければならぬと注意した。

今きみ子の傍には、看護婦のほか、叔父大佐の娘——満子と言ふ、今年十七のきみ子のためには従妹に當るのが、たゞひとりついてゐる。満子は腹黒き叔父大佐とは反對で、恰かも雪と墨のやうな心の遠ひ、やさしくて、素直で、そして温かみ

のある、今様のハイカラー女學生とはおもはれぬ位で、きみ子の大の氣に入りである。きみ子が負傷して病院へ入ると、満子は毎日のやうに行つて、看病しながら慰めたのである。きみ子の病氣の日増しに快くなつたのは、満子が心からなる看護の力が、少なからず、こもつてゐるとは、看護婦さへ話してゐた位だ。

「體が一等大事でせう、ですからね姉様、此の姉の仰しやるとほり、今日だけでも、疲勞びれてゐらつしやるから、靜かに休んでゐらつしやいなね」と、やさしいのは満子のこゝろ。

「エ、有り難うよ。満子さんには、ほんとに心配をかけてすまないわねえ。」と、きみ子も、しつとりとした物の言ひ様。

「いゝえ、何うして、すまないなんて、そんな事は姉様、お互ひでございますわ。それよりか、一日も早う、姉様に快つていたゞけばね。」

「何うして、満さんは、そんなにやさしく言つて呉れるんでしよう妻はほんとにうれしくつてよ。」

と、ホロリとして、

「だけでもねえ、妾考へると、いつそ、那のまゝ死んだ方がましたつたとおもつてよ。」

と、また涙を拭いた。

「アレ姉さまは、すぐ左様事を仰しやるんですもの、なせマア、そんなに心弱いと、聲に力をこめて、

「姉さまがね。萬一、姉様に、そんな事でもあつたら、後で二郎さんか何うなさるとおもつて、二郎様がひとりぼつちなら、今よりもつと、姉様よりもつと、

辛らいんでせうよ。ですからね、姉様は大事の〜お體でしよう。」

「どうねえ」と、うなづいて、

「ですけど、妾、いろんな事を考へると、ほんとに悲しくなつてよ。」

「さうでせうとも、妾だつても、悲しいんですもの、姉様や、二郎様のお心は何んなにかとお察しなますよ。」

と、張りのあるこゑも、何處となくうるんでゐる。

二人の話のあまりにつゞくは、さらに體に障りもやせんと、看護婦は、又こゝにも注意した。満子は出来る丈けは、口を噤んでゐるけれども、さみ子が話を絶やさぬので、甚く困じ果てゐる。

折りから満子の父が来た。二人はたちまち口を閉ぢて了つた。

叔父はやをら這入つて来て、二人を等分に見た。そして満子をグツトと見て、

「又お前たちは、めそ〜泣いてゐたんだな。馬鹿ッ」

と、叱りつけて、

「どうだねさみさちやん、少しは心持が可いかな。」

と、さみ子の方を向いた。

「ハ、有り難う、お蔭様で、餘ッ程快くなりました。ごさいます。」

と、さみ子はさつぱり答へた。さみ子は、亡き父とおなじく此の叔父が大の嫌ひである。其の顔を見ると、毛虫を見るやうに、おもはず悚然とするのである。それは父中將在世の折りすら、時々面倒を掛けて、父を苦しめたものが、今や父なく、母なき、此の後の我れ〜に對して、果して何う云ふ事をするであらうかと、それが早やくも打ち案じられるのである。

人は叔父大佐を、油断のならぬ男と風評した。まことに油断のならぬ男子である。強慾無慚といはうか、我利々々主義と云はうか。紳士にあるまじき仕打のみして、人に斥けられてゐる。

さればこそ、日高事件のあつたとき、先づ第一に喚問された、注意人物となつたのは、此の叔父大佐であつたのだ。

腹黒き叔父、油断のならぬ叔父といふ考がへは、始終きみ子の小さい胸を支配してゐる。かの事變のあつてから、今までの音信不通に引きかへて、初中、家に入りしてゐるよしを聞いて、いたくも打ち案じたのであつた。

その叔父が今面のあたり來たについては、きみ子はおもはず悚然として、其の面を見るのも辛らしとおもつた。

叔父は、そんな事には頓着ないらしい、

「犯人もまだ充分には分らないが、いづれ其の中捕まるに違ひない。がそれにして、きみさん、何と云つても、あんたが第一の証人だから、事實ありのまゝに、其の晩の事を話して、これくかうと隠し立てなく云つて了ふが可いだろうよ。あんたの一言によつては、一層早く犯人の手がかりを得るかも知れぬし、そうなるとな、

ソレ親の譯が討てるわけだからな」

と、何か意味ありげな事をいふ。きみ子は、其の叔父のいふ意味が何であらうと、そんな事には頓着せぬ。頭から叔父の云ふ事を聞くのが否やである。五月蠅いのである。苦しいのである。

「ハア、能く分つてます」

と、答へた。それツ切り何にも云はぬ。満子がそれと見てとつて、

「お父様、姉様は、今日は、よつぱと疲勢れてゐらッしやるから、ねえ貴女」

と、看護婦をかへり見る。

「ハ、今日は、動いたものですから、大分お疲ひれなすつた御様子でござりますね」と、看護婦も合槌を打つて、フト思ひ出したように、體温計を出して、

「チヨツとお計り遊ばして御覽なさいまし」

と、それをきみ子の脇の下に挟はさむのであつた。

「ナニモ今日に限った話じゃアないから、又ゆつくり話さうよ。ソレに何の道、あなたにはくわしう話さねばならん事があるから、それは、今少しあなたの體が回復なつてからにしよう」。

と云ひながら、ツ、と立って出て行つた。其の後見おくつて、さみ子はホツト吐息をついた。満子も何だか、壓せられたやうな氣味であつたのが、急に押し擴げられたやうにおもつた。

兼は少し出てゐるが左程大したことでは無い。看護婦は、體温計を收めて、次ぎの室へなにか用立しに出た。

満子は、さみ子の枕許へにじり寄つて、

「妾でさい、お父様の仰ッしやる事は、何だか、刺があるやうで、いやでくならないんですもの、姉様は、マアどんなにおいやでせうね」。

と、氣の毒ならしい眼をしてさみ子を見てゐる。さみ子は暫らく黙つてゐたが、

「ほんとに満子さんにはすまないですけど、妾ね」。

と、句切つて、
「満子様のお父様は、大さらひなの。何うして満子さんとこんなにも違ふんでせうね」。

と、しげく満子の面を見て、

「満子さんとなら、妾、いつまでもく斯うしてゐたいんですけども」

と、溜め息を吐く。

「いゝえ、妾だつてね」。

と、満子は、やさしく、

「碌なものぢやアないんですけど、でもね、お父様とは、妾全く反對だとおもつてよ」。

「さうとも、妾、満さんのやうな仁は、大すぎよ。だけど、叔父さまはね、そう言

ツちやア何ですけれど、腹の中が恐らくツて、妻、面を見るさへいやよ。』と、眉をひそめる。

五 五里霧中

きみ子の傷所は、遂に全く癒えた。日数は早や四十日をも過ぎたけれども、眞の犯人がまだ擧げられぬ。

其の中に、きみ子は、今回の事件の証人として、更らにきびしい審問を受けたが、はじめに陳述した以上の事は、全く知らぬ事として、他には何事をも語らなかつた。

夏のゆふへの、空晴れわたる、庭の廊下に腰かけて、四方山の話に耽つてゐるのは、きみ子と、満子と、そして二郎とである。

「いゝ晩ですこと、夏は、月の晩に限るんですね。」

と、云つたのは満子。

「さうね。秋も、春も、月の夜は可いけれど、夏の月ほど、氣もちの可い、牙え牙えする事はないわね。」

と、きみ子が答へる。

「僕は、春の月が可いと思ふね。」

と、二郎が口を入れた。

「何うして々す？」

と、満子が反問する。

「何うしたツて、可いちやアない乎？」

と、二郎は眼を圓にして、

「春の夜のおぼろ月夜なんてツて云ふちやアない乎。」

「だけとおぼろ月夜は妻さまらひよ。ヤッぱりこんなに、ハッキリした、牙えた方が

宜くつてよ。ねえ姉様、さうですわね。」

「え、おぼろ月夜もわるくはないけれど、夏の月は一等氣持が精々してね。ですけど」

と、さみ子は二人を見て、

「月の晩は、あたし、ほんとにいやよ。」

と、涙入つたやうすで、

「あの晩ね。あの晩は、丁度こんな可ひ月の晩でしたもの。ね父様と二人で、あつちのお庭を散歩してね。いろんなお話を伺つてゐたんですの。たけどそれがね。」

と、云ひさして、堪へ切れぬか、俯し目になつて、

「それが、もうお別れでしたの。」

と、鼻をすする。

「さう、こんな晩でしたの。」

と、満子も引き入れられたやうに、合ひ槌を打つ。

「え、こんな美しい月の晩よ。金州半島の月は、この月よりも、モット美しいとおつしやツてね。妾をからかつて、」

と、早や咳き上げて、

「連れてツてやろうか、なんておつしやツてよ。それがモウ此の世でのお別れと知つたら、モットく、妾、いろんなお話を……」

と、云ひさして、涙を抑へた。満子も、ハンケチに面を蔽うた

「姉様、又そんな事を云ひ出して。だから僕、姉様たちは嫌ひよ。」

と、二郎はムツとした調子で、

「姉様が、いつもそんな心の弱い事を云つてた日にやア、日高の家は、モウ駄目よ。今更そんな事を云ツたツて、泣いたツて、愚痴をこぼしたツて、亡くなられた人が歸ツて来なざる事もなし。お父様でも、お母様でも、其んな心の弱い事は、喜こん

で、聞いちやアおらッしやらないんだよ。姉様が、モット確固したわてくれなきやア、僕ひとりで何うするとおもひなすッてー』。

と、慌乎、姉の面を見た。さすがに悲しさ、心細さは、胸を突いて、おのづと涙のじみ出て来るのを、やツとかみしめてゐる。

「だけど二郎さん、これが悲しみますにゐられなくッてよ』。

と、涙を拭うた。きみ子はハツト氣を取り直したのである。

「ほんとに二郎さんは、感心よ。妾ね、二郎さんが、しつかりしてゐてくれるので、どんなにか力になつてよ』。

と、やさしく云つた。

「僕は、男子だもの』。

と、二郎は笑つた。

「妾たちは、全く駄目ね。すぐ悲しくなつて、泣いたり、なんぞして、やつぱり女

は仕様がないわね』。

と、満子は半巾を畳みながらいふ。軒端に吊るした風鈴が、風にゆられて、チリ

ンと鳴つてゐる。

折りから、小間使ひが、廊下づたひに其處へ来て、しとやかに手をついて、

「たゞ今赤阪の伯母さまがゐらッしやいましてござります』。

と、云ふ。

「おや、伯母様が』。

と、皆一様に斯う云つて、よろこばしうに立ち上つて、

「ちやア妾すぐ行くわ』。

と、きみ子が先きに、早や向ふへ行さかけると、恰も伯母は、小間使ひの後を追ッ

て来たと見えて、出會ひがしらに、ニッコリ、満面に笑を湛へて、

「ア、きみ子さん今晚は、二郎さんも、おや満子さんも』。

と、しとやかに此方へ来て、其處に座を占めながら、

「満子さんのお宅は、どなたもお變りはありませんですね。」

「え、みんな變りはありませんの。」

「さう、それは結構ですね。先日中は、さみ子さんのお世話で、満子さんは、マア、

大抵の御骨折りぢやアなかつたんですね。」

と、云ツてさみ子を見て、

「モウさみさんは、スツカリ快くおなりなの。體は一等大事にしないと不可ません

よ。次郎さんは相變らざる元氣だね。」

「え、僕は、上元氣でサ、母伯さんもお變りなくツて。」

と、挨拶して、

「よくゐらしつたんですね。」

「ア、モウ疾うから上るうう〜と思つてはゐましたけれど、ついね、

と、さみ子の方を見て、

「いろ〜都合があつたもんですから。」

この伯母は、日高夫人の妹である。陸軍少佐春川某の夫人となつてゐたが、春

川少佐が、日清の役に病死して、今は唯だ空閨を守る孤獨の身、また年ゆかぬ兄弟

二人の小供を育て、他に後指さくれぬを幸ひと、わびしく暮らしてゐる。年はま

だ四十にやつと届いたばかり、小格で、上品な容貌、さみ子とは何處やら其の姿の

似通ふところのあるのも争はれぬもの。

中將夫婦の亡くなつたとき、第一番に駆けつけて、何くれと後の世話をしたのは

此の伯母である。氣立ての宜い、心操のやさしい、一點やましいところのない婦人

である。さみ子も、二郎も、共に伯母様〜と之れに頼つてゐる。腹黒き叔父大佐

は、此の二人の姉弟が、自分を差し置いて、春川の伯母にたよるのを見て、當は頭

不快におもつてゐた、さればおのづから春川の家とも音信を欠くやうになつてゐた

のである。

先達で、中將死後の世話方について、二人が来合したときも、とかく、日高大佐は、春川夫人を邪魔物にして、小せり合ひが絶えなかつた。夫人は此の大佐のゐる間は、一時間とても、まことにゐづらいおもひがしたが、それでも、後の事をおもふと捨てゝもおけず、何くれとなく心をつけて、初七日を迎へる迄は仲町の邸に留つてゐた。

その後二度ばかり来たが、ヤハリ日高大佐と面を合はせるが辛くて、手紙の往復は素より、二郎の方からの訪問は時々あつたが、到頭今日まで、仲町へは来なかつたのである。

伯母は三人を見て、詞を更めた。

「妾が、今晩上ツたのは、他でもない、犯人がね、今度は、ほんとの犯人だらうと云ふんですがね、それが擧ツたさうですよ。」

「エ、犯人が。」

と、一同おどろいて此方を見る。

「サア、それについてゝすがね。これは、まだ表向きになつた話では無し、まだ秘密になつてゐるけれど、以前家の伯父さんが、まだ此の世にゐなかつたころからの出入りで、今刑事を勤めてゐなされる方があつてね。」

と、一寸思案して、

「其の仁が妾に、内密で、云つて下さつたんですよ。」

「エ、そうして一體、その犯人は、何物です。」

と、二郎が、やゝ慌てたやうな調子。
「さあ、それは、妾にも、まだよく分らないんですの。いまだに秘密になつてゐるさうでしてね。しかし、今度はてつきり、さうだと睨んでゐるさうでね。」
と、春川夫人は、一寸氣を變へて、

「きみさん、妻ね、あんたに、少し耳を貸して貰ひたい事があるんですけど、二郎さんも、満子さんもめても構ふはなしぢやアないんですけれど。」

「ナニ伯母さん、僕等は彼方へ外しませうよ。ねえ満子さん。」

と、二郎が氣を兼ねて立つ。
「ナニね、そんな改まつた話ぢやアないんですから、そんなにしなくツても。」

と、伯母は曖昧な態度で、
「それぢやアすまないわね。」

と、云ふ。
「い、え、今又來ますから。」

と、二郎は満子を促して、此の座をはづした。廊下をつたうて早や足音は向ふへ遠ざかつた。座に残つたのは、きみ子と伯母と唯だ二人。月はいよいよ冴えわたつて、涼しい風が一しきり、二人の體をあほつて、いづこへか過ぎ通つてゆく。

伯母春川夫人は、そのまゝ、平氣な調子で、

「きみさん」

と、云つた。

「ハ」

と、答へた、きみ子は今さらのやうに、伯母の方へ向き直つた。

「改まつて云ふのぢやアないがね、此度擧げられたその犯人と云ふのはね。」

と、詞におのづと、力がこもる。

「ハ、其の犯人が、何うかしまして？」

と、きみ子も、おもはず力が入る。

「實はね。」

と、聲を沈まして、

「前島と云ふ工學士だといふ事ですよ。」

「エ、前島、那の工學士の」

と、きみ子は、おぼえず慄然とした。前島といふのは、過ぐる夜、原田を以て、父にまで縁談を申し込んで来た其の人である。去年の夏、大磯の海水浴場で、友人に紹介されて、其の後數回、見るも汚ららしい付け文をして奇越した其の人である。自分は、那の晩は、唯だ夢に夢見る心地して、男の姿も、形も、定かにそれと心に殘つてはゐない。けれども、果して、その犯人が前島工學士であつたとすれば、……自分はまだことに大罪を犯したのも同然である……縁談を破つた怨み、それは他ならぬ自分の爲めであるのだ。きみ子は、此の咄嗟の間に、忽ち斯う云ふ考へがムラ／＼と起つて、胸も塞がるおもひがする。

夫人は、なほも、しづかに詞をつゞける。

「妾は、その事情は、よくは知らなかつたが、聞けば何でも、アソソレ、いつか、

あなたの縁談について申し込んで、お父様から体よく斷られた人だと云ふ事ですね。此のへんが、今度、犯人と目星をつけられたところで、それに尙ほ聞くところによると、きみさん、あなたはね。」

と、一段聲をひそめて、

「その前島といふ男とは、前から知つてゐた間柄だといふぢやアありませんか。」と、云ふ。きみ子は、此の不意の質問に、

「えッ」

と、云つて伯母の面を見た。そしておどろきの色が、其の面にたゞようた。

「何うして伯母様は、又、何うして、その様な事を、誰れに聞いてゐらしたんですの、それやアあんまりですもの。」と、聲を慄はしてゐる。

「いゝえ、きみさん、あなたが、たしかにさうと云つた譯ぢやアありませんよ。そ

れやア後で分るんですけど、鬼に角、さういふ様なうわさがあるんですけどからね、それで妾聞くんですの。さうぢやアないんですね。それはうそですな？」

伯母は飽くまでも情をこめた、やさしい口のまゝやう。きみ子は、たとい、いかなる強情な女であつても、これには眞實白状しなければならぬ。まして、いつはりなく、心ばえよききみ子は、云ひうる丈の胸の秘密は、此のやさしい伯母の前に打ち披ひて語らねばなるまい。

きみ子は、月に半顔を照らしながら、

「伯母様」。

と、くもつた聲。

伯母様、前島と

「妾ね、そんな事を云はれては、ほんとに何うしたら可いでせう。

いふ人は妾は、全く知らないんですの。ですけどね。」

と、云ひ淀む。伯母は又、

「何もね、きみさんに無いことをあるといふんぢやないんですから、其處を間違へちやア可けませんよ。ですけど、又、前島について知つてゐる事は、ありのまゝをお話さないね。」

「申しますとも、妾ほんとの事を申します。妾は、悔しくつて、く〜」

と、早や、涙をのんで、
「知ツてるのなんのツて、そんなことはないんですの。去年の夏ね、伯母様、妾大磯へ海水浴に行つたんでしよう。二郎さんと、下女を伴れてね、その時にね。」

と、ちよつとためらつて、
「濱で夕方お友人に出會つたんですの。それは、學校のおともだちでね、山下といふ仁ですの。スルト、其の仁がね、一緒に伴れ立つてた一人の書生さんを妾に紹介なすつたんです。それは山下さんの知るべの仁でしてね、其のかたが前島秀雄とおツしやツたんですの。」

と、又聲をのんで、

「ですけれど、それつ切り、漢でも何處でもお目にかゝつた事は無い人ですの。と、こゝまで云ツて、をまはゆげに、きみ子は、其の玉かと思ゆる面を、月に反

向けて、半さし俯くのであつた。
「さう、さうでしたか。それできみさん、ようく解りましたよ。それツきりもう何事も無かつたんですね。」

と、夫人は、さりげなくも裏問うた。きみ子は、をまぶせさうに、此方を向いて、
「いえ、それからね。」

と、聲を慄はして、
「ほんといいやな仁ですの。東京へ歸ツてから、手紙をよこして來ましたの。三度ばかり、はじめのは讀んで見ましたけれど、後のは、そのまゝ焼き捨て、了つたんです。」

と、うれひに堪への風情。

「さう、そんな事が、全たくあつたんですの、その事はね、警察の方でも、モウチヤ、トと探ツてゐるんですツて、えらいものですね、きみさん。」

と、きみ子の面をじつと見た。
「妾、何んなに云はれたツて、おもはれたツて、伯母様、モウ此れツ切りですの、他には前島といふ男については、何にも知らないんですの。たゞね。」

と、おんひ出したやうに。
「あの、災難のあつた晩、麴町の原田さんがゐらしツてね、向ふの座敷で話してゐるのを覗きましたの、其のときね、はじめて前島と云ふ工學士が、なんでも妾にね、縁談を申し込んでゐるといふ事を知りました。けれども阿父様が、ミツぱりお断りなすつてゐなさつたとおもひましたの。」

「で、その晩の曲物については、きみ様は、全く見覺もなにも無いんでしたか。」

と、夫人は、しづかに、きみ子の容子を伺つてゐる。きみ子は、その晩の事となる
と、又たその妻かりし夜の出来事をおもひ出で、か、おびえたように體をすくめ
て、早や涙ぐむで來るのであつた。

「モウあのときは、夢中でしたから、よくは、何んにも覺えてはゐないんですけど、
曲物はね、そんなに體の大きい方では無かつたやうですよ。物音に吃驚して、飛び
起きると、其の男が刀を捧げて、突つ立つて、此方に向いてゐるんでしょ。まるで
モウ膽をつぶして了つて、アツと云つて向ふへ逃げやうとすると、妾を追つかけた
やうでしたけれど、それつきり暫時は、なんにも覺えなかつたんです。お父様も、
おつ母様も、其のとき、あんな御最期をなさつたと知つてゐたら、妾も一緒に殺さ
れて了ふんでしたけれど……」

と、またもや、かなしみの涙に、胸をせき上げる。
「ですけどね、それやア間違ひよ、きみさんが残つてをればこそ、日高の家もこの

やうに明りがさしてゐるやうなもの、萬一、これが二郎さんひとりぼっちであつ
たら、どんなにか心細い事でしたらうね。」
と、ホロリとして、

「併しね、きみさん、今となつては却つて、氣をしつかりして、他から色んな邪魔
者の道入らぬやうに、なさらんけれア可けませんね。女や、小供ばかりとおもふと、
世間では、見くびつてかゝる例はいくらもあることですからね。」
と、語尾に力を入れる。

「ハイ、よく承知してゐますの。ですけど、あのをとおもひだすと、ヤツバツ、
悲しくなるんですもの。」
と、涙を拭ふ。

「それぢやア、きみさんは、それつきり、もう何にも知らなかつたんですね。」
と、話は再び初めにかへりて、夫人は尙ほ之れをたしかめやうとする。

「え、それ丈けですの。なんにも他には、妾には解らないんでしたから」
 「きみさん、あなたがね、今日一等大切な証人だと、警察の方ではしてゐるんですから、よく考へなすつて、そして、出来る丈け早く犯人を擧げるやうになさるとね。亡くなられた、お二人に對しても濟まないんだし」
 と、言葉を句切つて、

「なる丈け、此方に利益になることは、きみさんが、知つてゐる丈け、云つてしまいなさいよ。さうすれば、阿父様や、阿母様の體も、自然に討られるといふものですからね」。

と、ふくめるやうな口振り。きみ子は、

「ハイ、それやアよく心得てゐますから」

と云つてさし俯むいた。伯母にはまた深くさし込んで訊ねて見たい事がある。けれども明らさるまには、それと云ひかねて、いろ／＼裏を問うて見たけれども、これ

以上は最早や、きみ子の答へを訊く事もあるまじ、常日頃、心やさしく、正直なる女なれば、今まで答へし事に、つゆ偽りありとも、またおもへず、さらば之れまでと、かの夜の事は、こゝに話をとめて、尙ほ、此の後の事、呉れぐと氣をつけおきながら、其の夜十時頃、赤坂の我が家へと、仲町の邸を辭したのである。
 車にゆられ、歸る道すがら、春川夫人の胸の裡には、いろ／＼の、疑がひの雲の、往き來するのを留めあへなかつた。

春川夫人は、我れを忘れてひとり思ひに耽つてゐる……。

今日わざ／＼仲町を訪づれて、きみ子に會つたのは、云ふまでもなく、かの夜の事について、きみ子の知れるかぎりを訊かうとおもつたからである。それは、今度再び嫌疑者として擧げられた前島を検べるについて、きみ子が最も有力なる証人で、もしきみ子の口から、更に新らしい證據をも得ん事かと、かの刑事澤田なるものより、特に此の、春川夫人に頼み込んで、其のこゝろの秘密を探らしめたのであつた。

心の秘密!!

きみ子の心の秘密とは何?

世間の噂は兎も角、警視廳の睨むところは、皆一致して居る。かの夜の犯罪者が、單に強竊盜の類ひでない事は、その道の人には、容易に分るところである。若し單に強竊盜でないとするれば、彼れは何物ぞ。日高中將に對して怨みを懐くものか、さらずば、日高夫人に對して、何等かの遺趣を含んだものにならひない。

けれども中將は名だゝる名將軍、武勳赫々たるが上に、徳望一世に高く、將軍を慕ふものはあるが、將軍に怨みを含むものゝある筈は無い。夫人は又是れ當代の賢夫人、下女、下男に至るまで、一度び此の夫人に接したものは、終世此の家に、此の夫人の許にありて、奉公をしたいと願はぬものは無い。

何ういふ點から考へても、此の二人が人からうらみを受ける理由が無い。尤もはじめ、叔父大佐に一團の疑ひの雲がかゝつた。それは中將も大佐とは日頃

確執の間であるといふ點であつた。殊に、かの事件のあつた夜、大佐が家を明けてゐたのは、最も其の疑がひの雲を深らしめたのであつたが、よくよく詮議してみると、大佐は此の夜さる待合で一夜を明したといふ事實が分つた。

殊に大佐は、帝國軍人にはあるまじき、兎角の風評を立てられたほどあつて、其の心はきはめて卑劣である。外面には意地の悪い事を云つてをる癖に、其の心の底は、甚だしく臆病な男である。たとひ他に談らはれても、殺人など、云ふ大それた、大膽不敵の振る舞ひをなし得る男では無い。豆より小さい膽玉の男で、たゞ表面丈けは、強さうに見せかけて、兄を苦しめ、他人を苦しめやうとする、よく世間にある、所謂小人ばらの性格の男だ。

刑事は、探索の結果、たゞちに斯ういふ事をたしかめ得たので、いよく此の他には、遺趣遺恨として、深く疑がふ可きものがないといふ事になつた。

既に、物取りの仕業でも無く、遺趣遺恨の爲めでないとするれば、果して何である

乎、刑事の見當は、モウたゞ一點にのみ集注された。あはれきみ子は、此の疑團の中心となつたのである。

斯くて探偵の歩は進められた、前科ある植木職人の中井は、これが爲めの試験と囚まへられたのであるが、警視廳の眼目は、むしろ、尙ほ他にあつたので、其の一方において、着々探りを入れてゐた。

前島秀雄が、曩きに、喚問されたのは、かの兇行のあつた前夜、原田が日高中將と對談したが爲めに、其の話の中の主人公として、原田と共に、只だ一應の證據調べを受けたに過ぎなかつた。

併し今度擧げられた前島秀雄は、たゞの證人としてゝは無い、此の大罪を犯した、當の犯人としてゝある。

之れより先き、探偵の糸は、四方に擴げられて、犯人の搜索に心を配るうちにも、彼れ前島秀雄の行動は、たゞ盆や怪しみの種子を蒔くばかりである。

大磯に於ける、きみ子との近づきから、其の後手紙を送つて思ひのたけを云つた事から、結婚話の思はしくなかつた事などは、逸早くも刑事の耳をそばだしめたのであるが、更に今回、かの實業家の娘中村房江との結婚一條が、いよく前島の性格に一步進んで、疑がひを入れしむる動機となつたのである。

それは他でもない。原田と一つになつて、協議に額を鳩めてゐるのは、中村の持參金に、目をつけて、甘く之れを捲き上げやうとの魂膽である。そればかりでない。以前の妻君に對する冷淡鬼のごとき態度や、且つ時々待合ばいりをする癖のあることなど、これが尠ならず注意を惹いた。殊に最も甚だしい疑點は、彼の兇行のあつた夜、原田と前島とは、夜晩く某所に會飲した。そして原田は十二時頃、前島と別れて麴町の自宅に歸つてゐるのに、ひとり前島の其の夜の動靜が、不明である。無論自宅で寢んではゐないのである。

刑事が今度こそと突ツ込んだのも、斯ういふたしかな證據があるからである。さ

うすると、彼れは正しく戀の怨みを晴らさん爲め、日高の邸を襲うたものである。そして本人は素より、之れに關聯して、自己の要求を拒絶した中將を手にかけんとして、勢ひ夫人をも刃にしたものに違ひない。——併しなほ深く考へて見ると、其處に一團の疑雲が横はる。それは他ならぬきみ子の身についてである。果して前島が犯人として、其の夜の兇行を企てたとすれば、そして單に戀の叶はぬ怨みとすれば、第一に刃にかくべきはきみ子である。きみ子の躰こそ八つ裂きにしてもなほ飽きたらぬべき筈である。

それが、其の夜の模様について見るに、一等初めに刃にかけたのは中將で、此れにつゞいては夫人、そして、最後にきみ子に斬り付けたものである。

單に戀の怨みとしては、此の兇行の順序において、甚だ疑念をさしはさむべき餘地がある。

刑事が春川夫人に、特にたのんだは、此の點だ。春川夫人を通して、さらに有力

な證據をきみ子から得やうとしたのである。きみ子の身につゆ覺えのない事ならば詮なし、いさゝかでも、身に覺えのある事があらば、その秘密を洩らせば洩らす丈け、いよく犯人を確かめる上に有力になつて來るのだ。

伯母は、この使命を帯びて、こゝろならずもきみ子を訪うた。そして出來うる限り問ひ試みて見たけれども、更に新しい證據となるものは得なかつた。たゞ一つ、前島から手紙を寄越した一條は、刑事の調べた處とよく一致してゐるのであつた。

車は、今赤阪御所の前を横ぎつてゐる。おもへばきみ子の自白に、いつはりがあらうとも受けとれぬ。けれども年若き女の身の……若しや〜。

あゝ、神ならでは、これを公平に裁さうるものはなからうとおもつた。そして、今の前島は果して眞の犯人であらうか、何う乎と云ふ事をもおもつた。さながら身は五里霧中に彷徨するが如くにて……。

六 後見は魂膽

茲は四谷大番町、板塀の中の一掃へは、彼の日高中將の弟なる、日高大佐の住居である。其の奥の離れを明け放して、相對するは、主人大佐と、日高中將家の相續人、かの二郎とである。

二郎は、見るからに洒々たる貴公子、五分蒔りの、頭の毛のつやくとして、白面玲瓏、凜々しい中にも、女にせまはしき風情がある。

『それで私は、モウ疾づくにさうおもつてゐたんだがね』
と、叔父は口を切つて、

『何うで二郎さんも一人前の家を持たなければアならんから、それには私にも考へがある事で、ゆく／＼は満子をね』。

と、對手のかほを見て、

『二郎さんに一緒にして、とおもつてゐるんだけど、併しまだ、あんたも丁年に足りないし、修業とでも、此れからが大事だから、そんな事は、モツと後まはしにして、當分、誰れかで、あんたの家の後見だネ、傍から世話をして行く人がない譯には行かないね』

二郎は黙つて聞いてゐる。

『それで』。

と、叔父は又對手の面色を讀むやうにして、

『そこで私が思ふのぢや。ナ、二郎さん、あんたも今少し修業が大切だから、これから米國なり、英國なり、こゝ四五年勉強に行つて見ては何うだらう？ 何と言つても、これからは、二郎さんひとりで、日高の家を背負つて立たなければならぬ身だ、身軀に研きを掛けておかないと、折角日高中將とも言はれた、お父様に對して濟まぬ事が出来ても困るぢやないか、若しあんたが洋行するとなると、さしあたり

姉様ぢや」

と、一寸詞を句切る。

「姉様については、いろんな噂を世間からされてゐるし、今の際縁談と云つても、チト工合が悪からう。併し、幸ひにも傷所は、皆胴まはりで、外に出る處は、スツカリ避けてゐるから、容色に關係もなし、ナニ、七十五日といふ事もあるから、其中世間では忘れて了ふだらうし、何處か佳い處を見つけて、片附ける事としやう。其處は私に托しておけば、決して悪いやうには計らはぬからね。それは先づ後の事として、何うだね二郎さん、一日も早く洋行をする事としては」。

二郎は初めて口を開いて、

「ハア、いろいろ御心配をかけて、相済みません。何しろまだ丁年にも満りない身ですから、此の後とも萬事よろしくお願ひいたします」と、始終身體をキチンとして、言葉もおのづから禮儀正しく。

「しかし叔父様、私が洋行するといたしましても、まだ父母横死の後半年経つたか経たぬに、之れを決行するといふ譯にも参りますまい。切めて一周年でも済ましてからでないかと、餘りに輕卒なやうに思はれますし、それに不幸な姉の身を上についても、私は心にかゝるのですから、此の後何處か相當なところへ、身を固めるのを見た後でないかと、とても私は、ひとりぼつちに姉をのこしておいて、洋行は出來なささうにおもはれます」

「ナニ、そんな事は心配せんでも可えよ。それは叔父さんがね、キツト宜いやうに取り計つて上げるから、それよりも二郎さん自身の事が大切だ。今の時、一日愚圖々々すると、一日の損だ。少年重ねて來らず、人間老い易した、たとひ一周年忌が來なくとも、それはこちらで手落なくする事だから、そんな事は心配せんでも可え。たとひお父様にしたところが、おつ母様にしたところが、あなたの將來については大いに心配してをられるに違ひない。一周年忌を済ますといふ心掛けが親に對する

務めなら、早く洋行して、身體を研いて、將來永遠の計を立てるのは一層の務めだ。この道理を間違へてはならぬ。ナ、二郎さん」

「ハ」

と言つた切り二郎は叔父の面を見た。

「二郎さんは、此の私を叔父だとおもつてゐるだらうね」。

と、いやな眼付きをして、

「其の私が、誓つて悪るいやうには計らはぬから、萬事私に任しておけば可いではないか。何も好きこのんで此んな世話を焼くのではないが、これも唯だあんな等二人が好きあれとおもふが爲めだ」。

「ハ、それは好く存じてゐます。決して悪くおもつてゐるのではありませぬけれど」。

「ぢやア何うしたといふんだね」。

「いえ何うしたといふ様なそんな何にも六ヶしい事ではありせんので、唯だ、今少し時日を延引するまでの話で、マア姉の身が決定まり、父母の一周忌をも済ましてからといふばかりなんです。それに、眞の犯人さへまだ決定らない折ですから、
「犯人？」

と、叔父の詞は、やゝ激して來た。

「犯人と言つて、あなた、そんな事を言ふから可けないのぢや、此の調子では、いつ眞の犯人が出るか解らないではない乎、到頭出ないで済むかも知れないよ、さうすると二郎さんは何うなさるね、いつまでも懲圖々々してゐるつもりかね。そんな解らない事を言つては可かん。萬事は叔父様に一任しておけば宜いんだ」と、言つて、對手の様子を見て。

「それとも二郎さんは何かね、此の叔父を信用しないんだね、私に後見をして貰はなくとも宜いと言ふんだね」

二郎は、此の答へには、いたくも窮したのである。

叔父の後見、世間体には、これ位結構な事はない。けれども二郎は、かねて姉きみ子とも相談をして、此の叔父の後見のみは、頭を振る事に決めてゐる。春川の伯母ならば何事も相談相手に願ふところであるけれども、此の叔父には心を許す事が出来ぬ。さればとて、若し春川の伯母を頼りにして、叔父の方を袖にする事があつたら、叔父は又何んな事をし出すかも知れぬ。

父母亡き後、さしあつて、二人の小さい胸を痛めたのは唯だこれであつた。まだ此の世に父母ある頃より、心をおけぬ人と知つた叔父が、父母亡き後に如何なる事をしやうと企むかは、二人の早くも察してゐた處なので。

今日に限らず、自分が後見となつて、二人の事を世話しやうと言つたのは、モウ度々である。其の度毎に、風に柳と受け流してゐたが、叔父もさるもの、唯だそれなりけりでは済ましておかぬ。今度は洋行の話まで持ちかけて、親に對する務めと

いふ事を盾に取りて、今のやうな殿しい督促。

さすがに二郎は其の答へに窮したのである。明白に叔父の勧めを断るわけにも行けず。さりとして、之れを断らねば、次いで起り来る大問題の爲め、自分等二人の身に不幸の來る事は明らかである。

漸く頭を擧げた。そして惺乎叔父の面を見上げて、

「叔父様、御親切はよく承知いたしてをりますから、尙ほ一應姉とも相談いたしましてから、其の上で又御相談いたしますから。今日はこれで失禮いたします。と、辛うじて、これ丈けに切り抜けた。

叔父は暫らく考へてゐた。やがで重い調子で斯う言つた。

「二郎さん。それは、それで宜いから、尙ほ一度考へて御覽。併し今が大切の時であるから餘まり猶豫をすべきでないよ。あんたが此地にゐたつて眞の犯人が捕まるわけはなし。私が後見をしてゐるからには、たとひあんたが千里、二千里放れてゐる

ても、あんたの家に指一つさゝせる事はしないよ。萬事は此の叔父の胸中にあるからね。それとも又あんた等二人で、私を信用しなければ、モウそれまでの話、親類の縁を切つて了ふさ。」

と、意味ありげな事を言ふ。

「いゝえ、決して信用しないツて、そんな譯ではないんですから、が、兎に角、叔父様、今一應姉とも、相談いたしましたして。」

二郎は、叔父に別れを告げて、愴愴として四谷の家を辭し去った。

そして家を出やうとして門の處へ來ると、そこには満子が待つてゐて、やさしき聲で、

「二郎さん」

と、呼びかける。ムシヤクシヤしてゐるので、突慥食に、

「何んです」

と、言ふと、

「モウ、お歸り？モウ少し遊んでゐらッしやいよ。」

と、愛くるしい眼を見張る。此方は五月蠅さうに、

「有り難う」

と、言つて門を出やうとする。

「ほんとに酷いわ、二郎さんは、今日は何うかしてゐらッしやるわね。」

と、言つてツト寄ツて、

「これをね、持つて歸ッて頂戴ね。」

と、さし出したはばらの花の、造り花、見るからに美くしいのを、袖にしのばしてゐたのである。さすがに二郎も、これは断りかねた。

「だつて面倒臭いんだが」

と言ひながら、それを受けとつて、其のまゝフイと向ふへ出た。

門の處で、満子はしばらく見送つてゐた。

七 樂界の花

今日は上野に秋季音樂會の催しのある日で、十二時頃かち、馬車を驅るもの、腕車に乗るもの、三々伍々隊を組む學生の群れ、蝦茶、紫式部など、われも〜と音樂學校へ詰めかけてゐる。

プログラムの中で、一段人の注意を引いたのは、立花菊子女史のゾッ井オリンである。立花女史は、今年まだ十八、漸う音樂學校の高級に進んだばかりであるが、ピアノとゾッ井オリンは、實に都下の樂手をして、おどろかしむるの天品、ことにその美しいすがたは、白菊の花の、けだかい俤そのまゝにして、わけても人目を引く種となつてゐる。

二時頃少憩の後に、各科撰手の合唱があつて、さていよく菊子女史の番となつ

た。満場皆一時にとよめまわつて、未だ女史が樂堂に表はれざるに早くも、人氣は其の一身に注がれた。

やがて、しとやかに、正面にあらはれたのは女史である。お納戸矢絰の單物を着て、帯は七珍のをお太鼓にキチンと結んでゐる。色クツキリ白く、中肉中背、その姿の品よきは誰が目にも惚れ〜とする。髪は廂髪にして、小さな紅のリボンをうしろの方へ挿してゐる。上品と言はうか、美しいといはうか。黒眼勝ちの其の眼光には、さながらにして人を魅するの力がある。

― 聽衆は、一時に拍手喝采で菊子女史を迎へた。

上野の森がモウ夕日に包まれた頃、さしもに賑つた音樂會も、無事に終りを告げて、聽衆の散じ往きし後は、急にさびしさを覺えるまでの静かさ。今、動物園の前を通つて、東照宮の方へ歩いて来る、年若き二人連れ、一人は今

日の音樂會の花と言はれた立花菊子女史、一人は日高中將の忘れがたみ、日高二郎である。

二人の關係について語らうとすれば、先づ菊子の身の上から語らねばならぬ。

牛込大久保餘丁町抜け辨天のあたりにて立花といへば、モウそれにも人に知られる身分、主人の忠男と言へば關西のさる地方から出た政友會の代議士として、政界にも、議會にも、其の名を知られたものである。

菊子はその第三女に生れて、今音樂學校に通つてゐるのであるが、琴、活花の師匠が、たま／＼二郎の姉きみ子と同じだったところから、いつしかきみ子と親しくなつて、互ひに往き來をするうち、殊に二郎とは同じ學校にゐる事ではあり、誘ふものなきに、おのづと親しくなりゆいたのである。

二郎は音樂學校で、ピアニストとして、青年樂手の間に名を知られるのみならず、其の獨唱に於ては、西洋人さへ時々舌を捲いて感嘆する事がある。常ならば、今日

も二郎の獨習は必らず加はるべきであつたが、父母の喪中として、自ら謹んで、切なる人の勸めをも容れなかつたのである。

樂手として、貴公子としてあはれ、今日の會堂において、此の右に並ぶものもあるまじき二郎は、今、一堂の花とたへられた立花菊子と肩を並べて、東照宮の彼方へと去る。若し其の姿を認めるものがあつたときは、おもはず羨望の情に堪へぬ事であらう。

『ねえ日高さん。妾ね、今日はモウ貴君もキツと何か聞かして下さる事とおもつてよ。』
と、片手にツッキオリンの袋を重さうにさげて、厚い重ね草履を、大股に踏んでゐる。

『だつて僕、まだそんな事は出來ないぢやアないか。全体あんな場所へ出るのも如何かとおもつただけだ。』

二郎は快活に斯う言つて、片手に詰め襟のボタンを押へながら、片手は小さいス
ラツキに任して、これも大股に、而し女は氣を配つて、成るべくはゆつくり歩いて
ゐるらしい。

「ですけど、斯んな事はなさつたつて、何も悪い事はないでせう。」
と、横に二郎の面を見ながら、

「貴方のお父様だつて、お母様だつて、音楽はあんなにお好きだつたぢやアありま
せんか。」

「それやさうサ。だけど生前と死後とはおのづから違ふからな。」
と、笑つて、

「いくら父が好きだつたからつて、お墓の前で、ヴァイオリンも弾かれはせんか
らな。」

「さういやアさうですね。ですけど貴公がお出にならないと大分失望なさる方があ
るんですよ。」

るんですよ。」

菊子は、何心なく斯く言ひて、おもはず其の詞のいやしきを悔いた様に、たゞ顔
を赤らめたのである。けれども二郎には其のけはひさへ見とれなかつた。

「そんな事があるもんか、菊子さんが出たので、みんな大満足、大恐悦で聞いたん
でさ、又今日のは特別の出来だつたからね。」

「お、いやだ、日高さんは、あんな事を仰しやるんですもの、けふのは妾全く詰ら
なかつたとおもつてよ。」

「何うして、御冗談を仰しやつては可けませんよ。」
と、笑つて、

「あの拍手喝采の音にも、どれだけ聴衆が満足したかは分るではないかね、其の時
菊子さんが、ひどく濟ましてゐた姿を、姉や満子に見せてやりたかつたね。」
「お、さう〜」

と、菊子は、急におもひ出したやうすで、
「姉様は御都合があるなら、何うして満子さんでも伴れてゐらッしやらなかつたんですね。」

と、菊子は、今日満子の、二郎と供にあらざるを怪しんだのである。これまで、音楽會のあるときには、姉きみ子はもとより、満子までを必らず之れに伴ふた二郎が、今日は不思議にもたゞ一人であるので。

二郎はこゝに或る何物をか、フト聯想した。

満子と言ふ詞は、はしなくも二郎に不快の念を起したのである。實は、かねてより、此の日の音楽會には、是非一緒に伴れて往くやうにと満子からの頼みであつたのを、仔細あつて、其のまゝ知らしめせずに、二郎ひとりで來たのであつた。そして其の仔細と言ふのは、讀者諸君のほゞ知られる所であらう。

満子は、叔父大佐の娘としてはゐれど、まことは、其の先妻麗子の妹である 早

くから大佐の家に引き取つて世話をしたので、誰でも大佐の娘としか思つてゐない。大佐には今年十五になる正志と言ふ男の子を頭に、花子と言ふ十二になる女の子や、常子と言ふその妹、清志、忠志等都合五人兄弟の子數であるが、それらの兄弟はみな自分のをばとは知りながらも、眞實の姉の如くに心得て、満子の事を姉様くんと親しみ、慕つてゐるのである。

叔父の心には、此の満子を以て二郎に、往くくは娶あはさうといふ考へである。時々はそれを二郎の前でもほめかしてゐるけれども、まだこれと打ちつけて言つた事は無い、言ふ可き機會もなければ、又まだそれを實行すべき時でもないからなので。

けれども叔父の心にはモウ疾くにさう決めてゐるので、それとなしに、時々それが二郎の耳に入る。二郎はそれを聞く度びに不快の念に堪へなかつた。

叔父大佐の言ふ事は、何一つとして心に染まざるもののみなるに、分けて此の事

を耳にしては、又と再び面を合はすも厭はしいまでに思つたのである。

満子は二郎に對しては、心ありや、心なしや、それはたしかに分らぬ、けれども、やさしい其の心遣ひは、誰が目にも分る、けれどもそれは満子の生れ付きで、これはまみ子に對しても又おなじ事である。

それは兎に角、二郎にも一つの戀はあるが叔父大佐はまだそれを知らぬのである。満子ならぬ美しくしの花に、おもひを寄せてゐるのである。其の花!! それは今、こゝに相并んで歩いてゐる、菊子其の人に他ならぬ。

其の菊子の口から、満子の事を聞かれるにつけ、腹黒き叔父の、ツイ此の程の話の件々忽ち浮び出で、不快の念に堪へ難い。

「何うして満子さんはゐらッしやらなかつたの」と、又菊子は裏問ふ。

「何に、僕が知らしてやらなかつたからさ。うるさいからな」。

と、まぎらした。

「それは、貴公ひどのね。あんなに満子さんは音楽が好きでゐらッしやるのに」と、菊子は、我が身の事のやうに、二郎を怨じてゐる。

いつしか、東照宮の石段を下りて、二人は今、不忍池のほとりに出た。風一しきりサツと吹き起して、涼味骨に沁むばかり!

「日高さん、ほんとに茲はいつ來ても可い處ね、妾大好きよ」。

と、しつとりした調子で、そして何處やらに情のこもつた口調。「さう?」

と、此方は軽く答へて、

「ウン、悪るい處ぢやアないね。斯う向ふに大學が見えて、彼方に、白聖高樓が并んでさ。岩崎の壁はあそこへ見えて、後は此の上野の森サ。悪るくはないね。こんな處で、一生音楽を研究してゐると好いだらうな」。

と、二郎は立ち停つた。此の時は、又叔父の洋行話を思ひ出して、所詮一度洋行しなければならぬ身だと言ふ事におもひ至つた。

そして洋行といふ事、これは何でもない話であるけれども、これとともに、此の上野の森にも暫時は別れを告げねばならぬ、姉にも、伯母にも、満子にも、東京と分れ、日本と分れねばならぬ。今茲で斯うして話しをしてゐる菊子とも無縁別れねばならぬ。その時に自分の様な多涙多血のものは、果して何うするであらう乎。と、斯ういふ事を吐嗟の間に、おもひ浮べて、何となく、心細い感じに打たれたのである。菊子はそれとは知らずして、ヤハリ池の面を眺め、上野の森を振り返つて、向ふにイすんでゐる。

わざと動物園の前から別れた二ツの車は、今や、此方へ廻つて来て、二人の姿を認みて走つて来た。

二人は静かにそれに乗つた。二郎が先きに——菊子は後から……。

八人の噂

人の噂は七十五日と相場の定つたものではあるが、日高一家の惨事は、七十五日や百日にては仲々世間の噂を放れなかつた。殊に眞の犯人の、手がりを失うて、新たに世人の恐れと、疑惑とを招いた事であるから、いつまでも、其のまゝに残つてゐたのである。

前島が、犯人として捕はれたのは、夏の半であつた。豫審廷では數回訊問の結果、みづから犯人だといふ事を自白して、尙ほ其の他に原田と共謀して、私印偽證をまよやつた事が曝露した。けれども、いよく公判廷に出ると、全く前の自白を非認して了つた。たゞ私印偽證だけは事實として承認したけれども、日高の一件については、全然打ち消して了つた、尙ほ種々取り調べの結果、此れは全く證據不充分といふ事になつた。

しかし、私印偽造は事實である。また彼の三宅といふ、銀座の實業家に、縁談の申込をしなかつた前の事、借主は前島で、保証人は一人は原田、今一人は、彼の技師中村であつた。が、中村には無断で、たゞ名儀上であるから、殊には、今までの關係上借金に連帯などを頼むにも頼まれず、遂に印鑑を偽造して此れを瞞着しやうとした。前島が何して、此の金を要したのかといふに、それは他でもない、此の頃北海道で、炭坑が発見された、それは前島の友人も此れに加はつてゐて、其の資本金調達の事を前島に頼み、且つは前島自身にも、此の事業に手を出さぬかと勧められたのであつた。

三宅房江との結婚話に夢中になつたのは即ち此の時の事である。一方金子の才角は、原田の手でモウほとんど纏まつてゐたけれども、開いた口に牡丹餅、棚から團子といふ調子の好話だから、この方が旨く行けば、何も借金などしなくともといふ考へから、しまりに其の方をあせつてゐた。

が、それ等の希望もたくらみも、スツカリ外づれてしまつて、二人ともに、私書偽造罪に問はれて、柿色衣を着ける事となつた。——そして三宅との縁談は、もとより永劫に断れてしまつたのである。

日高中將の事件は、こゝに一段落をつげたのである。それは犯人の出たと言ふのではなく、モウ到底容易に、その手が、りを得る事が出来ぬといふ事で。

忘れ易きは、世の人心、初めは、口を揃へて騒いだ世人も、筆をそろへて、矢笠しく言つた新聞紙も、いたづらに、懸賞金を持ち腐らして、今は一言其の事について、言ふものもなくなつた。

早や秋も過ぎ、冬も去つて、年立ち春を迎へる事となつた。

世の中の人の打ち忘れるに引き更へて、今も尙ほ、心に新たなる悲しみの堪へぬのは、日高の一家である。二郎の胸のくるしみもさる事ながら、姉きみ子の心の中は、日にくさびれゆく、冬枯れの野のやうである。

たとひ人の噂は七十五日とはいふも、彼の夜の出来事の爲めに、さみ子が受けた胸の苦るしみは、仲々に打ち消す事は出来ぬのである。あらぬ噂を世に傳へられて、悲しさのあまり、一時は身も死して、父母の後を追はんかと決心した。親しい二郎に、やさしい満子、恩愛の絆に引かされては、それも出来かねたのである。二郎も満子も、共にさみ子を慰めてゐる。春川夫人も、分けて心を盡くしてくれる。

たゞひとり憂ひの雲を増させるのは、叔父大佐の此の頃の振舞ひ、おもへば其の心の底にわたかまる秘密、これを解くのは容易である。が之れを防ぐには、姉弟二人の身としては、餘りに力が無過ぎる。

叔父は今後見として、何くれとなく日高の家を切り廻はしてゐる。此の腹黒き叔父の此の様を見ては、春川夫人をはじめ、親戚の誰れ彼れ皆心を痛めてはをれど、差し出口叩いて、却つて日高姉弟の爲めに悲しき事もありてはと、唯だしづかに、

後の模様を見て、口を噤んでゐる。

春もいつしか過ぎ、夏の初めとなつた。思ひ出されるは、去年の此の頃である。まだ父母揃ひて世に在りしものが、一夜の露と消えたのも恰度此の頃の事と思へば、さみ子の胸ははりさけるおもひである。

やがて一周忌を迎へた。此の日は、春川夫人も、叔父も、其の他の親戚縁者、日高の家に打集うて、亡き人を吊らうた。さみ子の悲しみは更に新たになつた。

此の頃から、さみ子の身體に少なからず異状を呈したので、氣分すぐれず、始終ふさぎ込んでばかりゐる。醫者は烈しい神経衰弱だといふ。

それには頓着なしで、叔父は、しきりに、さみ子に結婚をすすめる、ますますさみ子は身をなやましてゐる。

其の一方では、二郎の洋行をも、叔父はこりすまに促してゐる。けれども二郎は、姉の身體の常ならぬを見て到底遠く出て行く事の出来ぬのを語つてゐる。かと、お

もふと、叔父は又満子を妻合はさうといふやうな事を持ち出して来る。

今宵も亦、二郎の室では、叔父がしきりに此の話をして、二郎を苦しめてゐる。

「ナア、二郎さん、あんたもモウ二十歳ぢや。身體は身體で固めておいて、そうして勉強に取りかゝるとした方がよからう。あんたが口癖のやうに云ツて居た一周忌もモウしまつたぢや。兎角あんた等二人は、此の叔父の云ふ事を用ゐてくれなくて困るがな。」

と、二郎の面を見て、

「それについてぢや。アノ満子は、かねぐゝあんたの両親と相談して、行々は二郎さんに呉れると定ツてゐたし、それに満子の方でもあんたなら、よるこんで来るだろうし、善は急げぢや。何うぢやる一日も早く、此の方丈は、まとめておいては。」

と、二郎の氣を計る。
二郎は黙つて俯むいてゐる。

「おい二郎さん」

と、少し詞に力を入れて、

「ヤツバリ、此の叔父の云ふ事を用ゐないといふんだナ。」

「イ、エ、全くさう言ふ譯ではありませぬが」

と、二郎は漸く詞を入れる、

「ぢやア何うしたと云ふんだネ」

「何うしてツて、まだ何にもそんな事について、其の、エ、考へてゐるのにはありませぬので。」

と、二郎は答へに窮してゐる。

「考へてないとは、あんた何をかネ」

と、叔父は、まくしかけて問ひ返す。

「何をツて、其の縁談の事ですがね、私には、まだ少し早や過ぎると思ふんです。」

「エ」。

と、此方は思はず聲を高めて、

「早や過ぎる早や過ぎぬと言ふ事は、あなたの知る事ぢやアないんだ。此の叔父が、萬端心がけてヤツてゐる以上、世間に對して顔の立たぬやうな事をする氣遣ひはないではない乎。一體、そんな生意氣な事をいふから氣に喰はぬ。それぢやア聞かう、あなた、いつになれば早や過ぎぬ年になるのかね。ニ、いつになれば、立派な一人前の事の出来るやうになるとおもつてゐるのかね。さういふ口巾の廣い事はまくもでない。あなたのやうなものに、満子をくれてやらうといふのも、ツマリはあなたの兩親との前々の話があるからだ。何にも、是非にと言つて貰つてもらうやうなのでもなからうよ。」

と、激昂して見せたが、又おもひ返したやうな句調で、

「マアね、二郎さん、あなたも少し考へて御覽、そしたら、叔父の言ふ事の、萬

更無理でない事もよく解るだらうから」と、今度はおとなしく出た。

「ハア」

と、二郎は頭を下げた。不安の念は、おのづから其の面にあらはれてゐる。

叔父は、暫らく黙つて、其の様子を見てゐたが、いづれ又日を更へてとおもつたらしく、匆々に座を立つた。

今、襖を開けて外へ出ようとする、二郎が急に、聲をかけた。

「叔父様」

叔父は、何事かとふり返ると、二郎はキッチンと座ツたまゝ、

「到底考へ直す餘地はありません。私はマア縁談の事については、一切お断りを致しませう。姉もあのやうに病氣をしてゐますし。私とても、尙ほ一層勉強して、身體を研いてお目にかけたいとおもつてゐるんですから」。

と、キツパリ言ッた。叔父は、おもはず後戻りをして、何か激した調子で云はうとしたが、急に氣を更へたらしく、わざと莞爾して、
「マア、モ一度よく考へて見るが可い。それとも、そんなに勉強がしたければ、一日も早く洋行する乎。いづれなりと、決心をしなくては、唯、さう威張ッて見ても、實行しなければ駄目だよ、ナア二郎さん、いづれまた」。
と、言ひ残して其のまゝ出て行つた。二郎もやがて立つて、其の後を見送つたのである。

九 戀？ 秘密？

さみ子は此の頃益々身體を痛めて來た。特別にこれと言ふ病狀もない、が、唯だ打ち沈んでゐる。時にはひとりで涙を拂うてゐる。二郎も、叔父も、伯母も、満子も、皆、過度に頭をつかつたが爲めに未だ、神經衰弱だとおもつてゐる。醫者も

現にさう言ッてゐる。けれども又た、それどのみ見る事の出來ぬ事もある。と言ふのは、さみ子は、その仲よしの満子を對手に、心を慰めてゐながらも、尙ほ兎角に、沈んだ話に移ッて行く。さうすると、時々自分の胸中の秘密の解さ難い事のあるのを満子に洩らす事がある。

さみ子は、さすがに女性である。其の秘密の結晶、これを満子に語ッて、幾分心を和らげればよさうなものだが、それもなし得ずして、苦しむのである。
「満子さん、妾ね、世の中で、妾ほど不幸なものはないわ、心の中には、いろんな事が、こんがらかつてゐるんですけど、これをね、スツカツ打ち明けて、満子さんにだッて話す事が出來ないんですの、此れさへ取れて了へば、妾もネ、ほんとにたのしい月日を送る事が出來るんですけど」。

と、さみ子は、しんみり言ふ、
「ぢやア、何うして、妾にそれを仰ッしやつて下さらないんですね」。

と、満子が裏問ふと、

「さうね、妾にも此ればかりは、何うしても話されないのが口惜しいとおもふんですの」

と、さみ子が言ふ。

「ぢやア、そうしていつまでもお苦しみなさるんですね」。

と、満子は怨めしきうに、

「姉様が妾を信じて下さるのなら、何うかね、何んでもスツカリ仰しやッて下さいました」。

けれども、遂にさみ子は、何事をも語らぬのか常である。

こゝは相州大磯の海岸、磯邊はなれた、松並樹の間に、美しい別荘の一構、その奥の座敷の風透しよきに座を構へて、相對せる二人の年若き令嬢、一人は日高さみ

子、一人は日高満子である。

さみ子は眩しいランプの光を背に浴びながら、愛らしい口元から、折々はいと微かな溜息を漏らし、外面の景色を眺めては、一入物思はし相に、満子の妙なる琴の調べを、聴くともなく聴いて居たが、ホロリと一ト雫、頬を傳ふて流れたのを、殊更にそれを拂はんともしない。

さみ子のたゞならぬ風情の、満子の胸に讀まれたか、満子は半ば弾きさしの、琴の手をとめて、爪をはづしながら、

「アラ、姉さんは又何か考へて在ッしやるの」

と、常よりも愛らしい聲は、愛らしい満子の愛らしい胸より、迸り出たのである。

「妾、折角姉さんのお心をお休め爲やうと思つて、拙いのも我慢して弾いて見たんですが、矢張り拙いもんですから……、それで、姉さんにも面白く聞こえないんでせうよ」。

と、投げるが如くに言ッたが、さみ子を思ふ深い心は、何處となう自然に表はれて居た。

「何もそんな事はありませんわ、餘り満子さんが、お上手なことから、つひ引き込まれて、何んだかうたの中の人様な氣になつて居ました。——全くお美しいお聲に感心いたしましたわ。」

と、立派には言ひ放ッたが、たゞならぬ胸の煩えは、包まんとして包み切れず、有聲に言葉もおのづと打ち凍ふて居る。

「アラ、そんなにお賞めなすつては、反つて妾、さまりが悪ふござりますわ、たゞ此頃餘りに姉さんが、何か深く考へ込んで在ッしやるから、少しでもお慰め爲よと思つてねえ——、アラ、又姉さんは沈んで在ッしやる、妾姉さんのお心がお恨めしいんですよ。」

と、早や臉は潤ふて居る。

「妾は心から姉さんをお慕いして居るのに、矢ッ張り妾をお疑ひなすつて在ッしやるんでせう」

「満子さんを疑ぐるなんて、そんな事はありはしないんですが。」

と、さみ子は曖昧な答へをした。

「妾も心配事が有れば、御相談もいたしますし、お力も借なければなりませんから、姉さんも何卒妾を眞實の妹だと思つて、妾をお信じ下さるなら、何卒何事も打ち明けて、二人の中には少しの曇りもない様にお話して下さいね。それやもう妾も女ですから、大したお力にもなりませんまいけれど、御相談相手位にはなれませうよ。」

と、何處までも、さみ子を思ふ心の溢れて、ハンケチで顔を掩ふて泣き沈んだ。

満子の心盡くしが、さみ子には嬉れしく感じられないでもないが、さりとして、心の裡を漏らす程の勇氣もない、が、優さしい満子の心根に時ならぬ時雨はさみ子の膝を傳はるのである。

「それはもう、妾も満子さんを眞實の妹にも増して、便りに思つて居るんですから、普通の事なら、誰れより先に満子さんにはお話しはいたすんですが——什ふぞこれ計は聞かないで居て下さいよ」。

何處までも秘密を守らうとするさみ子を其涙含んだ眼で、凝乎恨めしさうに眺めて、力無ささうな、太息を吐いた。

「ア、ぞれでは矢張り仰しやつては下さらないんですね」。

「さうでせうよ、其筈ですわ」。

と、満子は寧ろ自暴氣味に言ひ放つて、かたへの琴を押しやれば、コロリンと美しくしき音は時ならず、絃より漏れた。

「アラマア、それは飛んだお門遠ひですわ」。

「だつて、さうなんでせう」。

「さうなんでせうツて何？」。

「言はないで置ませうよ」。

と、満子は何か思ふ事が有るらしく言つたが、有繋に女の顔にパツと薄紅の色を呈した。

「ハ、ア、満子さんは、妾に意中の人か何か有る様にお思ひなんでせう」。

「それでなくつて、何もそんなにお沈みになる事もないでせうよ。お一人で心配して居らつしやる處を見るのは、妾には大變な苦しみなんですわ、何うでせうか、姉さん、依然お話下さる譯には参らないでせうか」。

と、満子はさみ子の爲ならば、何事なりとも厭はぬとの決心は、其面に表はれて居る。

全く戀や何かの淺慕な事を苦しんで居るのでは有りませんわ、その様な事なら何んで満子さんにまで隠し立てを爲る必要も無いんですが妾はね、ほんとに女々しいやうですけど父や母の事をおもうと今でもモウ唯だ死んで了ひたいとおもひますの、

もう何にも云はないで居て頂戴ね」

と、深き物思ひに沈めるさみ子は太き溜息を漏らした。

「ぢやアね、何なりとも妾に打ち明けて、お心の苦しみを慰めるやうにして下さいな、而し妾を信じて下さらなさやア其迄ですわ」。

「いえ、其様事はありませんわ。満子さんを信じないなんて、其様事は少しも有りませんけど……」

と、さみ子は少し言ひ淀んだが、前よりは微かな聲で、

「満子さんが餘り御親切にして下さるもんだから……」

「それでは姉さん、これからはホントニ妾を妹と思つて下さるんですね、妾嬉しいわ」。

と、潤みし眼も何時しが冴えて、いと、嬉し相に膝立直して、一ト足前に乗出した。

さみ子は尙ほも黙して居たが、聽て一ト際太く溜息を吐いて満子の方を見返つた。

「満子さん、此の廣い世の中でも、あなたより外には、妾の頼りに思ふ人はありませんしね、又相談相手も無いんですよ……。かう申しましては、随分疑念深い様ですけども」。

「いえ、姉さんさへ信じて下さつたら、妾は何様な事でもお力にもなりますし、御相談相手にもなりますわ、而し姉さんに信じて貰ふのは、妾には出来ないでせうよ」。

「あらッ、飛んでも無い事仰しやつては困りますわ、何もそんな心で言つたのでは有りませんがね、而し事柄が少し込み入つて居るので、世間有り勝ちの事では無いんですからね、聽けば何人だつて驚きますわ」
と、言つて又伏し沈んだ。さみ子は唯だ亡き親を悲しむ意外に、更に胸を苦しめる或る物を持つてゐるらしい。戀か、情か、それはさみ子ならでは誰れも知るに苦しむのである。

「何の様な秘密だつて、吃度口外は爲ませんし、何處までもお力になりますわ。」
さみ子は満子の思ひ遣り深いのに心からの感謝の意を表した。
秘密の緒口のさみ子の口より告げられるのを、今か今かと心待ちに待つ満子の心
の中こそ愛らしいものである。

「此の事はかりは、お話ししないで置ませう、又其中には自然お話ししなければなら
ない時機も来るでせうから。」

と、さみ子は無情なう言ひ捨てたが、満子の胸にはいたく響いたものか、ハンケチ
を顔に押しあて、再びさめくと泣き沈んだ。

「何うしても出来ないうんですか、矢張り妻の心が姉さんにお分りにならないんでせ
う。」

「いゝえ満子さんのやさしお心は、よく分つて居ますの、私一生其の御親切は忘れ
はしないんですが、ねえ満子さんよく聞いて下さいね——、世の中の秘密にもお友

達や皆さんにもお話して可い事も有れば、親兄弟にでも何處までも秘密にしなけれ
ばならない事柄も有るんですが、妻の秘密は親にも兄弟にも打ち明け難い譯の有る
事ですから、それも大抵の事なら満子さんだけには、御相談もいたすんですが、此
度の事は少し深い理由のある事ですからね、此上もう何も聞かないで居て頂戴、後
生ですから、

「ア、よく分りました、尙此の上お問ひするのは、益々お心苦しい思ひを爲せる計
りですから、妻もう何にも言はないで置ませうね、」

と、満子はまた心の底に落ち附かぬ節のないではないが、此上根堀り葉堀り問く
のは、さみ子を深い淵に陥らしめるのであると、斯う思つたので、涙を拂ひ笑顔を
作つて、話頭を他へ轉じたのである。

秋風、庭の松ケ枝におとづれて、肌に触るもいと冷たさをおぼえる。

十月の一夜

さみ子の心地すぐれずとて、大磯の濱に来て、モツ一月あまり、秋も早や半過ぎとなつた。

郎には二郎が、下女下男を指揮して、ひとり留守居してゐるのを、案じつゝ、氣に入りの小間使よしといふのを傍において、しづかに心と身を養なうてゐる。

時々は二郎もおとづれて来るが、わけて、満子は、土曜の日は必ず尋ね来て、一夜をそこに明かすのを常としてゐる。

やさしいは満子の心である。さみ子を姉と頼み、二郎を兄となつかしんでゐる。さみ子の満子に對する情も亦、まことにやさしいもので、實の妹の如くおもひなしてゐる、たゞ二郎は何となく満子をいとうてゐる氣配が見える。

それも無理ならぬ事情のあるのは、彼の叔父が、無理強ひにせんとする懇談の事

と、今一ツは、二郎の心の裡には、立花菊子といふ字が始終映じてゐるからであ

あはれ二郎は、いつしか戀の囚となつた。菊子も亦、心の底には、二郎なつかしとの念はあれど、たゞ愁にはほふ苦しみを抑ふるのみ。

ことには満子とわりなき間柄なるを思つて、しづかに、其の心を抑へてゐるのである。されど時機あらば二人は、たのしい夢に飽かねばならぬ!!

二郎は、近來足繁く、立花家に入りするのみならず、立花の家でも、日高の家に出入りする事となつた。二郎は、時々菊子を伴ひては、日比谷に散歩したり、土

野に行つたりする。時には、菊子の妹の露子をも伴うてゐる。立花の家でも、二郎には深く心を許してゐるので、たまには、二人で夜遅く歸るやうな事があつても、

少しも氣にとめてゐない。却つて二郎と一緒にならば安心してゐる位である。けふは金曜日であるが、明日は丁度祭日で、休みだと言ふので、二郎は菊子を伴

うて、大磯に休らへる姉のさみ子を見舞うたのである。最も菊子の母も、共に来たのである。妹の露子も共に来たのである。併し母はさみ子を見舞ふと、暫時して、忙がしい身だからといふので、東京へ歸つ、後に残るは、二郎と、菊子と、露子とである。いつもならば満子も來可き筈であるが、何か差支へがあるを幸ひ明日の土曜をまちわびながら、都の空で大磯をしのんでゐる——。二郎にはこれが却つて幸ひであるのだ。

今宵八時の汽車で歸らふといふ、モウ一時間も餘裕は無いのに、今、波打ち寄る磯邊に立ちて、寄せては返す浪のしぶき面白しとながめてゐるのは、二郎と菊子とである。

月は、早や向ふの山の端に高く差し上つてゐる、下界一色、銀の布を敷いたやうに見える。波打際にゐんで、貝など拾うてゐるのは、今年漸う十一になつた、露子である。うすばんやりと月にうつらうてゐる。

二人は此方に、ツト腰を下ろして、おもしろる想に話をしてゐる。

浪の音、ドウくと響いて、折々絶えては又續くのであるが、やがて、

「アノネ菊さん」

と、詞を改めたのは、二郎である。

「何うして返事をしないか。今僕の言つた事が菊さんには聞えなかつたか」。

と、もどかしさうに言つた。けれども菊子は、其の花の面を月に向けて、じつと見入つたばかり急に唇を開かうともしない。身動さだにしないのである。

二郎は、静かに、其の面を見成つてゐたが、やがて又、

「菊さんは、怒つてゐるんだネ、」

と、一寸考へて、

「ぢやア僕が悪かつたんだよ、ネ、何うか赦して下さいよ、ねえ菊さん」。

と、二郎はちつと菊子の顔を眺めて居たが、

「それはもう、僕だつて菊さんのやさしいお心は疾ッくに分つて居たんです、分つては居たんですが、餘り輕卒に口を出して反つて後日の禍の種ともなつては、所謂角挽めんとして牛を殺すの類で、大切な一婦人の一生を誤まる様な一大不幸に遭遇するかも知からない」

と、かう思つたもんですから、非常な辛いおもひはしながらも、實は今まで燃ゆる胸の炎を抑へつけて居たんです、それにまだ雙方の家の事や、此の後幾久しく變らない美しい愛と圓滿な幸福とを確かに貴嬢に願つ事が出来やうかと、其邊も幾度となく危ぶみ考へた上で——而も深く貴嬢を愛するといふ私の心を離れた慎重な態度で繰り返し考へた上で——貴嬢こそ實に僕の願つても迎ふべき良妻だと心算かに思ひ慕つて居たんです。が今まで思ひの丈けを打ち明ける事が出来なかつたので、却つて貴嬢のお心を苦しめてすまなかつた」と、二郎は偽り無き心をあらはした。

仰げは月は愈々冴えて、白き光りを中空に漂はせて居る。長く地上に曳いた松並樹の影は、對合つてゐる二人の間に嬉しい流れを作つて居るやうだ。

二郎は心の裡に落ちつかぬ所の有ると見えて何處とは無しにそわ／＼して居る、が其中にも菊子の心を引き入れやうとして居る。

「それとも菊子さんは僕にこんなな思はれるがお厭ですか……」
戀する人も戀せらるゝ人も胸は同じく乱れて居る。

菊子は尙ほも無言の儘差し俯むいて美しい手に礫を弄んでゐる。

「お厭でせうねえ……」

と、二郎は菊子の顔を、危ぶんで覗き込んだ。

「さうでも無いんですが……」

と、奥齒に物の抉まつたやうにいつた。而し其眼は愛らしく輝いて居た。

「さうでも無いんですが……」
と、二郎は鸚鵡返しに言つて、

「ハ、アでは分つたー。ちや何んですね、いつぞやも貴嬢からの御忠告に、僕と満子さんと餘りに親しく交ら無い様にとの事でしたが、貴嬢は僕と満子さんとの關係を疑ぐつて居るんですね」と、故意と力をこめていつた。

「い、え、何もそんな譯は有りません……、別に満子さんに就きましては、深い深い秘密が有ります……それが今申し上げる事は出来ないんです……」。

「何ッ、満子さんには大變な仔細が有りますッてーマアそれは聞か無い事として、……では誰今のお返事を聞かせて下さいね」。

熱した二人の耳には、礎打つ波の音が遠く聞こえて、春の様に静かだが、其中に烈しい情の炎は燃えてゐる。

「アノ二郎さん……、かう申しましては、何んだか冷淡な、無情なうに聞かえませうが」。

と、深き思ひを籠めて
「あの妻は仕うあつても貴嬢の嬉しい愛を満足に受ける事は出来ないんです」

と、漸うに言ひ放つた。
寂しい秋風は松の梢を拂ふて去つた。

「ヤア、何ッ、僕のを満足に受ける事が出来ない。實に意外なお言葉だ」
と、少しく腹立たしげに言つて、

「ちや菊さん、貴嬢は始めから僕を愛しては居なかつたですね、貴嬢の僕に對する舉動も皆偽りでしたね」。

「何んで偽りにお慕いしませう、それはもう心からお慕いして居たればこそ今日までもこんなにお親しうお交際もいたしたんですが」。

と、菊子は悲しさに言つて、そつと二郎の手を握つたが、直ぐに放した。
「それでは菊子さんには許嫁でも有つて、義理にせめられて他家へお嫁づきにならんければならぬのですな」。

「いゝえ……」

と、聲は微かに喉の奥で聞こえた。

「それでは外に何か理由が有るんですね」

と、嘆息しながら、

「では何ですね、所詮貴嬢は僕と苦樂を共にする事が出来ないと言ふんですね」。
と、執念深く聞いた。

「ハ、ハイ、誠に済みませんが、據無く……」。

と、低く頭を下げたまゝ、力なく吐息を漏らしてやつとかう答へた。

二郎は斯程迄に心から菊子を思つて居るのに、昨日までは二郎を愛してゐた段か

い菊子の心のかくも冷淡に急變したのに、心細くなつて來た。そして細く長く溜息を漏らして菊子を凝視してゐたが、突然、

「然うですか」

と、冷かに言つて、

「あゝ夢だ、夢だ。男子此世に生れて、始めて戀の味を覚え、始めて其味に厭く。

昨日まで愛せしもの今日は敵となる。あゝ夢だ、夢の世だ」。

と、嘆息したが沈痛な聲で、

「貴嬢のお心の何處に感謝すれば可いんでせう。僕は今日の今日まで貴嬢を信じて居たのに貴嬢は何んといふ冷淡な方なんでせう……。而しもう此上は何も愚痴は申しません。誠にとんだ失禮しました。然し僕もこれが爲めに少し心に得る處がありました。菊さん僕は實に馬鹿でした。今日こそ迷の夢も醒めました。自分の無智な事も悟りました。もう此上は愈々奮發勉勵して、身を碎いてまでも修業いたしま

す、早速此地を去つて外國に向ひます。そして、五年と十年と勉強を積み少しは人らしいものとも成る事が出来ませう、さすれば多少の地位と人格とも得られるんでせう。其上でこそ貴嬢の様な淑女に對して結婚も申込みませうが今の僕の身分では、迎ても貴嬢の愛を受くるに足るだけの資格は有りません——。愈々奮發します、勉強します、これも全く貴嬢のお蔭です、僕は感謝します。それではお別れいたしますが、時折は僕の事も思ひ出して下さい。よし又途中で倒れましたら、線香の一本も手向けてやツて下さい……。殊勝らしく言つたものゝ、又何か思ひ出して

千萬無量の思ひに二郎の胸は千々に碎けたので有る。臟腑を絞る二郎の言葉に身を切る思ひの菊子は、其儘二郎の膝に突ツ俯して泣き沈んだ。

群を離れた一羽の雁は悲し氣に空を鳴き渡つた。

「菊子さん」

と、聲は少しく震を帯びてゐた、

「僕はもう何んにも申しませう」

「二郎さん、妾が悪うござりました、什ふか赦して下さいね」

「それでは菊子さんは、僕の捧げる愛を快く受けて下さるといふんですか」

答こそ聞こる無いが、熱き菊子の頬はおのづと二郎の手にヒシと觸れてゐるのである。

「これでこそ僕の氣も晴々しました、もう悲しい話は止して、楽しく月を眺めませう——。そう、そう、我々の結婚式には、僕の親友の田中喜郎が一番に飛んで來るんだらう。そして頓狂な聲で四海浪靜かにと唸るであらう、ハ、ハ、ハ……まあ何はともあれ、これから我々は楽しい生涯に立入るのだ、あゝ今宵程愉快な晩は無い」と、軽く菊子の手を握つて、雲の行衛を眺めて居る。

今まで大人しく濱の眞砂を拾つて居た露子は此時一段と聲高く、

「お月さん若いナ……」
を歌つてゐた。

十一 云ひ得ぬ悲

世にあはれなるは、淨き少女の、思ふ男にふりすてられし心の苦しみであらう。
満子は、二郎を兄としたしみ懐かしんでゐるが、其のこゝろの底には、言ひしらぬ悲しさがひそんでゐる。
またふり分け髪かみの心こころからして、あそびたはむれた胸むねの小琴こごは、いづれもおなじ少女心に、二郎じらうしたのはしの念ねんはきざしてゐたので、殊ことには、いつしか耳みみにした許嫁いよめの仲なかといふに、たゞさへなつかしさが一入増しほまして來た。けれども、其の後のち二郎の家と、父との間に、快よからの事ことがあつて、行き來もおのづと吐絶とげえて來るにつれ、其の話はなしさハ水の泡うぶと消え行かねばならぬ運命うんめいとなつた。菊子は深く悲かなしんだが、心丈こころだけけは

變かはらぬ昔むかしと固かたく守まもつて、いつか再び、元の様ようになる時ときもあらうとたのしんでゐた。
圖はからずも、中將夫婦ちゆうじやうふうふの災難さいなんが、又々互たがひの家の往來わうらいとなつて、満子も亦仲町またなかつまちの家に出入でいりる事の度重たびかさなる様ようになつたにつれ、茲こゝに再び昔むかしに返かへるよすがを得えて、うれしと思おもつたのもホンの束の間つかひのま、二郎は、分わけても此程このほど來、満子には、ろくく口くちも利きかぬ。

おもへば父ちちと二郎との間の確まこと、これが主なる原因げんいんであらうと、強しひて満子は心こころをおちつけるのであつたが、それにしても、立花菊子たちばなきくことの此こゝの頃ころの交情かうじやう、邪氣よけいなき満子の心こころにも、うたぐりを容ゆるれずにはゐられなかつた。

満子は、過すぐる日ひ、大磯おほいその別莊べつしやうにきみ子をおとづれたとき、其そのの前日ぜんじつ、二郎と菊子きくことが、來きて、夜よおそく歸かへつたといふ事を聞きいて、少なからず胸むねとゞろかしたのである。

けふ、また満子は、たゞひとり大磯おほいそに、きみ子をおとづれた。

秋の日の、さびしさは一入、悲しき胸の中にしみ込み、やさしい姉の一言に、なぐさみを得ばやと、ステーションを出ると、すぐ車に乗って、海岸へ向った。松並樹の小陰を通ずる路を今しもだら／＼下りに下りやうとすると、下からも一輛の車が来て、サツと行き合つた。

見れば、車上の主は日高二郎であつた。おもはず満子は、車を飛び下りて、したしく詞をかけたいとおもつたが、二郎の容子のたゞならぬ今日此の頃、ハツと氣を取り直して、只だ笑ひながら挨拶した。二郎も目禮して、

「お一人」

と、云つたさき、車は互ひに擦れ違つて了つた。

満子は、急に世の中が狭く、陰氣になつたやうにおもつて、ふさぎ込んでゐた。

モウ濱へ行かずに、此のまゝ何處かへ行つて了はうかとも考へる。

と、おもつてゐる間に、早やくも別荘へ來た。車を下りて靜かに中に入ると、小

間使ひが、聞き付けて飛んで來た。

「おや満子様。よくゐらつしやいましてね。今も今、おうちをしておたところな

んでございますよ。」

と、これは心からやさしい聲で迎へる。

「さう。妻の噂をして？」

と、中に入つて

「姉様は何うして？」

「ハ、格別お變りはござりませぬですよ。」

と、云つて、急に詞を變へて

「今までのね、お嬢様、若様がおらしつてゐたんですよ。何處か、其の邊にお會ひになつたんぢやありませんか。」

「エ、ステーションの手前で。」

と、氣のない返事をした。

「姉様。妾ね、秋は大嫌ひですの」と、突如として満子が云った。

「さう」。

きみ子が受け答へをして、シット満子の顔を見入つてゐる。

障子を細目に開けて、すぐ下の波打つ磯際をかすかに見渡してゐる。

「妾ねえ、かなしいからいやですの。秋くらの悲しいいやな時はないんですの」

「さうね。秋は悲しと昔の人も云ッてるものね。だけれども、それを悲しいとおもふ

のには、ヤツぱり何か本人に悲しいとおもはれる事があるからよ。吞氣に構へてれ

やア何もないんだわね」。

と、きみ子が云った。

「だけれど」。

と、満子は口籠ッて、

「一體世間が、いやに、沈んでゐるんですもの」。

「沈んでゐるけれど、悲しいとおもふのは満子さん別よ」。

と、暫時相手を見て、

「妾もね、此の頃はホントにいやな氣ですの、満子さんは、妾が、心に秘してゐる

と云ッて怨むんですけど、妾ね、ホントニ心の此の苦しみを何うかして捨て、了へ

ば可いとおもふんですの。何うしたツて、此れを捨て、了はなさやア、妾の病氣も

癒りはしないんですし」。

と、一寸考へ込んで、

「妾、ホントニ血を吐くやうに苦しいんですよ」。

と、シ、ヨ、ン、ボ、リ、云、ふ、満子にも引き入れられたやうすで、

「さうね、心に苦しみがあるからこそ、秋が悲しいんでせうね。ですけど、姉様の
はあんまり酷いんですよ。」

と、怨めしげに對手を見て、

「そんなに苦しい事がおあんなさるなら、何うして妾に云って聞かしては、下さ
らないんですね。妾のやうなものでもね。」

と、沈んで、

「お力になれないとも限らないんですわ。」

「アレ又、満子さんは、すぐそんなに言ふんですから妾困ッて了ふわ。此の妾の苦
しみはね、言ふに言はれない、ツマリたゞひとりで、何と言ふ事はなしに、苦しむ
んですの、これといふ理由があれば、それや話すんですとも、さうして充分力にな
つて貰ふんですけど、そんな何ぢやないんですから。」
と、言つてわざと笑顔を見せた。

「でもねえ、ほんとに妾を信じて下さるなら、仰しやッて頂戴ね、妾何んなにかう
れしいでせう!!」

「言ひますとも、そんな事なら、きつと話すんですけど。」

と、言ひさして、深き溜息を洩らした。満子は、たゞきみ子の面を目成つてゐる。

やがてきみ子が、おもひ出したやうに。

「満さんは、秋が悲しいと言つたでしょ。ちやアヤッパ、何か心に苦しみがあるん
ですわね。」

と、今度はきみ子から反問した。

「悲しい事ッて、妾ね、此の頃は、何とも言はれないやうで、此の世の中が、狭く

くおもつてますの、何うしたんでしよう。」

と、何気なく言ふ。

「何うしたんでしょッて、それは満子さんの心に聞かなきゃ。キット何よ。何か悲

しい理由があるんでしやうよ。』
と、さみ子がさり気なく言ふと。

「イヤ、そんな事はなかないですけど」

と、満子は斯く答へたものゝ、二郎の事が忽ち電光のやうに胸の小琴にひびいたので、いぢらしくも、さつと顔に紅を染めざるを得なかつたのである。

さみ子は、二郎と満子との許嫁であつた事も無論承知してゐる。殊に此の頃、二郎の満子に對する舉動の、昔に變る事をも知つてゐるのである。

併し考へると、二郎の斯くするのも無理ではない、父兄弟の、二人の間に、交通の絶えたとき、満子と二郎との間の約束も無論絶えたものである。日高の叔母は、これを非常に悲しんださうであつたが、それも大佐のやり口が悪いからとあきらめて、泣き寝入りに寝入つてゐたのである。

今度、再び、元のやうに往き來をするやうになつたにしても、此の許嫁を舊のや

うにするについては、父と母との心を探つて見なければならぬ。併し今はモウ亡き人の數に入つてゐるので、それも詮ない望みである。

そののみならず、二郎は、此の頃益々叔父のやり口について、快からずおもつてゐる。それは二郎ばかりでなく、自分も素より、春川の伯母も、これには皆同じ感であるので、自然、叔父の家とは、面白からぬ事となつて來る。

おもへば満子は、世にも哀れな女である。心はやさしく、氣心はよく、殊に、まこと日高の血筋を受けぬ身は、何處までも肩身狭く慎みぶかく、叔父に對しても、弟妹に對しても、二郎に對しても、自分に對しても、まごころこめて、情をつくしてゐる。

たゞそののみならず、満子は、實際、二郎を往く末の我が夫と定めてゐるのである。其の二郎が、たとひ如何なる理由があらうとも、今の如く冷やかに満子に對するのを見ては、同情の念に堪へられぬのである。

が、二郎の肩を持たねば、いやな叔父は益々何のやうな事を仕出すかも知れぬ。さればとて、二郎の心のまゝにさせれば、満子は悲しい月日を送らねばならぬ。きみ子は、斯う考へて、これも亦心を苦しむる一ツの種子となつた。今、まのあたり満子が、さびしい、悲しげな、面持ちして、自分に訴へる處あらんとする様なのを見ては、おもはず、涙ぐまれて、せき込んで来たのである。「満子さん。貴女は、全たく可愛いわねえ」と、ホロリとして、「満さんのやうなやさしい仁はないわ」と、其の手を握つた。

「……………」
満子は、斯う云はれると、悲しさが、一時にこみ上げて、きみ子を見入つた、其の眼には、早や涙が一杯。

「姉様」

辛うじて、満子は斯う云つた。

「妾はね、姉様より他に、此の廣い世界にも、たよりの思ふ仁はないんですもの。」
後は、口籠つたが、涙はモウ瀧のやうに……………」

「エ、満子さん。妾もね、満さんは實の妹と思つてゐますの、満さんと斯うしてゐるなら、妾モウ何處へも行かないで、いつまでも、斯うしてゐますよ。」

「姉様、妾、一生の願ひですから、何うか妾をね、眞實の妹と思つて下さいな。」

「満さん、あなたが、そんな事を云はなくつても、妾はね、あなたを眞實の妹と思つてますの。満さんもね。妾をホントの姉とおもつて頂戴ね。」

と、云ひながら、涙をホロリ。満子は、モウ泣き入るのであつた。

云ふに云はれぬ、きみ子のくるしみにも増して、戀になやむ、少女心の悲しさは、身を切らるゝよりも切ないのである。まして、今満子は、戀を得るにも到らずして、

早くもこれを失はんとしてゐる。其の當の對手たる戀人の姉に、心の裡を打ち明け得ず、たゞ慰さめられて、其のうれしさと、頼むかひなき身の悲しさと、とり交せた心の苦しみに、満子は耐へ切れず、ひた泣きに泣き入るのであつた。其の夜、満子は、こゝに泊つたが、翌日、都に歸ろうとして、分けても残りを惜しんだ。きみ子は、其の心の中を察して、いつまでも茲に共にと思はぬでもなかつたが、さうもならず、又次の休みを約して、別れを告げた。きみ子は、いつになく、門の外まで、満子をおくり出して、いよく別れに望んで、固く握手したのである。満子の心の中をおもへば、昨日にもまして、あはれ深く、なつかしくおもひなしたのだ!!

十二 胸の痛み

秋から、暮れへかけて、きみ子の病氣はやゝ怠りをおぼえて、一度び都へ歸つて来た。

叔父は相變らぬいやな面をして、何彼と世話をやきに来る。満子も来るが、二郎に遠慮して、さう時々は面を出さぬ。春川の伯母は、大磯にゐたとき二度ばかり尋ねて来て呉れた。

今都へ歸ると、第一に駆けつけて来たが、やつぱり、大佐に氣を配つて多くは往來もせぬやうにしてゐる。

きみ子の病氣は、家へ歸つてからも大した變りはなしに、新玉の年立ちかへる春を迎へた。

正月はおしなべて、いづくも同じく、静かなうちに賑つて来る。日高の家でも、

二日には二郎の友人や、きみの友人相集つて、うたがるたの遊びをした。一ツにはきみ子の此の頃のふさぎ勝ちなるを氣晴らしにといふ、召し使ひのもの、違つての勤めからである。

此の夜は、満子も二人の妹を伴れて来て、其の中に交つてゐた。が、立花菊子も、亦妹を伴れて其の席に入つてゐたのである。

菊子のたのしげなるに引きかへ、満子は不快の念心頭に沸いて堪へ難く、つゝに中座して歸つて往つた。

此の後も二郎の満子に對する冷淡は、益々其の度を加へて来た。

ひとり氣を配り、心を勞するものは、姉のきみ子である。何とかして、二郎に、たとひ心に染まぬ事はあらうとも、やさしい満子の事であるから、つき合ひ丈けは、昔に變らず、むしろ出來うる丈けやさしくしてやるやうにと云ひたひが、うちつけに、それとは言ひかねてさし控へてゐる。

きみ子は、家の事、人の事、親戚のもの、交りにまで、一々心を勞せねばならぬ。さなくとも身心共に勞れてゐる身は、春に入りてより未だ幾何もあらず、一夜、はからずも風邪の心地とて打ち臥したのが原因となつて、又枕も上らずになつた。

去年以來、病ひの爲に苦しめられて、漸く此の二月ばかりを都の家に歸つて起き臥しする事となつた身は、今亦病ひを得て、胸の病みと發熱との爲めに苦しめられる事となつたのである。

二郎は素より、満子も、伯母の春川夫人も、家の召し使ひの誰れ彼れ、皆一日も早く其快方に赴むかん事を祈つた。されど二月中旬の大寒を控へて、きみ子の病氣は、一段の勢ひを得た。皆人憂ひの眉を集めたのである。

が、此のあはれむべききみ子には、神も亦暫時のなぐさめを與へやうとてか、さては、亦尙ほ此の後、浮き世の辛き目を、一入見せやうとてが、春は、櫻の散り行くころ、おもひの他に病氣怠つて、ツ、ツ咲く頃には、たゞ朝夕の熱の出入りある

と、時々咳に苦しむとばかりで、他には目下の處、さして氣遣はるべきほどの病人でもなくなつた。

併し、此の頃、一日強ひて起き出で、庭の草花の間をそゝろ歩るさしてゐると、急に胸元が苦しうなつて、急いで座敷に歸ると、まだ椽に上らないうちに、凡そ一合ばかり血汐を吐いたのである。

さすがに、此れには自分ながら驚るいて、其處へ斃れると、二郎と小間使ひとで、早速援け起して座敷へ運んだ、其の夜は又一時に熱が出た。春川夫人も、満子も、叔父も、二郎の報知を得て、早速駆けつけた。其の夜春川夫人は、日高の家に泊つて、ろく／＼寢もせず介抱した。

翌日は、やゝ熱もとれたが、まだ安心されぬ。二郎は、ひとり心を痛めてゐた。が、醫者の語る處によると今度の熱は、咯血の爲めの發熱である。全體の身體の工合から云ふと、餘程よくなつてゐる、無理をして庭に出たのが刺戟となつて斯う云

ふ事になつたけれども、決して今の處心配はいらぬたゞ靜かにしてゐねばならぬと云つた。果して、其の通りで、二三日すると、又元の通りになつた。が、さみ子はかねて期するところではあつたが、自分で、自分の吐いた血を見て、今さらの如く打ち驚かされたのである。

益々神経をなやますと共に、元氣は早やなくなつて、今にもモウ息を引き取る乎と思つてゐる。さうなると心細くなつて悲しさに堪へやらぬ——。伯母の手を握つて、無言のまゝ、ひた泣きに泣き入つてゐた。

併し、いろ／＼なぐさめられると、又其の氣になつて、出来るだけ養生して、早く癒つてやろう、さうしなければ、二郎が嘸かし心細いであらうと考へる。傍醫者は、今少し身體に元氣がついてくれば轉地して養生するがよいと勸める。傍のものも皆、これに同意した。

考へると、轉地療養しても、果して何れほどの效があらう。昔から此の病氣では

んと快くなつたものはない。殊に自分は、生れながらにして弱い體質であつた。其の上父母亡き後の苦勞に、ひどく胸を痛めたのであるから人一倍身體に障つてゐる。とても元の體になりやうは無いらう。

よしんば、全く癒るにしても、又生きて此の苦しみを見んよりは、一層此のまゝ死んで了つた方がましである。今はモウ死んで苦しみを脱するより他に致方は無からう！

きみ子は、すぐに斯う考へて来る。併し二郎の事をおもふと、又死に度くも無い。たとへ死ぬべき運命でも、今しばらくはながらへてやらねばならぬ。

きみ子は、斯くて又大磯行きを決行する事にした。今しばらくは、精々養生して見やうと云ふ心になつたので。

天氣の好い日を選んで、身體に大した熱のないのを見て、或る日いよいよ東京を出發した。小間使ひとり、看護婦ひとり、此の二人を伴うて、きみ子は今仲町の家

を放れるのである。

何となく又と再び此の家には歸られぬ氣がしてならぬ。満子も、二郎も、彼の立花の菊子まで、玄關の處で見おくツてゐる。伯母は新橋までといふので、これも車に乗つた。

夏のはじめの、むし暑い風が、フワリ、と吹いてゐる。

きみ子の車のまはりには、先づ二郎がすりよつて、

「姉様、それでは、行つてゐらつしやい。僕もね、明後日にはキント参りますから。何卒精々お大切にね。」

と、云つたが、たよりの思ふ唯だひとりの姉が、今此の重き病ひにかゝつて、瘦せ衰へた躰を辛うじて車の上に支へ、別れ惜げに、出でて行く姿を見ては、さすがに胸ふさがる思ひがした。

——涙の、ます毛の潤はすのを、強ひて下向いて凝乎噛みしめたのである。姉も

耐らず、ハンケチ片手に、面を掩ふたまふ、

「二郎さん、家の事はよろしく頼みますよ、姉様の事はそんなに心配しなくつても可いんですから、勉強丈けは、なさいよ。」

二郎は頭を下げた。

「日高さん、何卒ね、精々御養生あそばせな」

と、これは菊子の聲、涙にうるんでよくも聞かれぬ。

「ハイ、有り難う」

と、かすかに答へた。

「あのね、姉様」

と、車にひたと、スリ寄つたのは満子であつた。

「妾ね、明日、キツト姉様の處へ参りますの。何卒途中をね、氣を付けてもらッしやいね。」

やいね。」

片手に半巾を押へたまふ身を振るはしてゐる。

きみ子のいたくしい其の身體を見ては、誰れも皆同情の念禁じ難ないものがあ

らう。分けても満子は、姉とたのむきみ子の此の有様を見て、何とも云ひ難い、心

細さと悲しさをおぼえたのである。早や明日會はれる身でありながら、又會ふと

さもないかと、別れを惜しむのも、げに哀れの種子ではある。

満子は、今も二郎の無情をうらんでゐる。其の當の敵たる菊子のそこにあるのを

見るにつけ、自分も共に、きみ子を追つて大磯へ行き度いやうな氣がする。其の悲

しさや、此の悲しさを取り交せて、満子は耐らず、ワツと計りにきみ子の車に取り

付いて泣いた。

伯母も、看護婦も、病人のいつまでも斯うしてゐるのは身體に觸るとれもつたも

の、此の悲しい光景に打たれて、皆たゞもらひ泣きをした。

いよく車は門を放れる。目送する人の胸の中には、一日も早くきみ子の病氣の

よくなつて歸り來らん事を願つてゐる。目送される人の心の裡――、病めるきみ子の胸の中は、果して何んなであつたであらう？、

十三 哀愁

きみ子は、大磯へ着くと、其の夜は旅のつかれで少し發熱もしたし、咳も餘計に出た。が翌日、満子が約束通りに尋ねて來たころは、東京にゐたときと大した違ひないやうになつてゐた。

土地の變つたためでもあらうが。少しは軀の工合も善いやうに覺える。また、海岸の散歩には出て見ないが、別荘の庭へは日のすゞしい間は下り立って、少しばかりの散歩をしてゐる。或ひは此の模様なら、ズツトよくなるだらうと、自分でたのしんでゐる。

其の後十日餘り經つた。春川の伯母がひとりで訪ねて來た。きみ子は、母に會つ

たやうに喜んで、病氣も何うやら輕うなるとおぼえた。實際きみ子の今たよりとおもふのは此の春川の伯母より他には無いのである。伯母はきみ子が、少しは元氣づいてゐるのを非常によろこんだ。

「マア幸福ねえ、きみさんの元氣が此の様だ。妾はね、きみさん。二郎さんから聞いてゐましたけれど、旅をしたのであるから流車などのさはりはなかつたかと、今來て見るまで、心配してゐましたよ。だけど、此の元氣では、モウ安神ですね。ほんとに能く養生して早くお癒しなさいよ。」

と、春川夫人は、心から、きみ子をいたはつてやる。
「エ、伯母様、お蔭様で、妾マア、此の通りですから、何卒御安神なすつて下さる。」

と、云つて、きみ子は、寢床ながらに伯母の面を見てゐる。
見るときみ子の眼には、早や涙の露を宿してゐる。やさしい伯母の詞に動かされ

たのであらう。

「さみさんはね、氣が弱くツて可けませんね、氣を大きく、確乎してゐなさいやア、凡て此の世の中は渡ッちやア往かれやアしませんよ。」

と、伯母は、わざと眞面目に、意味ありげに云ふ。さみ子も、其の意味の解ッたと見えて、

「ハア、さうでせうね。」

と、云ツて、涙を拭うた。

「伯母様、わたしは、ホントに氣が弱くツて困るんですの、何うしたら可いんでせう。」

「それはね、それが又、人間の修業ですよ。悲しい事があツたら無暗と泣いたり、うれしい事があツたら、無暗とよろこんだりしちやア、修業も何もあツたものぢやありませんね。人は何處までも精神を確乎持ツて、人に此方の氣心を計れぬやうに

しなさいやア可けないね。そして、唯だ眼の前の事ばかりに氣を配ツてゐちやア可けませんよ。ズート向ふの方へ頭をおいて、考へてゐなさいやアね。」

と、云ツてさみ子を見た。

「さうですね。」

と、さみ子は成る程と云ふやうな顔付きをして、

「妾は、何うしたのか、ほんとに氣が少さくツて困りますの。」

「では、修業して、氣を大きくなさいね。」

「ハ、之れからさういふやうに心掛けてゐませう。」

と、云ツて、かすかに、笑ひを漏らした。

「さうですとも、さうして心を大きくしてゐなさいやア、何事でも損ですよ。ツマラ、ン事に辛配するんですからね。とり分け病氣の時には、心を大きくゆツたりして養生するんですね。さうして自分で氣を使ツたり、氣をあせツたりしないでゐなさいや

ア、癒るべき病氣も癒らないし、何がツマランて之れ位、ツマラン事はありませんよ。

「伯母様、妾、ね、これから、モウいろんな事は考へないで、精々養生して、一日も早くよくなりますの。」

「さうく、是非さうして下さいね。きみさんが、快くならないと、きみさん丈の損ちやアありませんよ。日高一家の不幸ですからね。二郎さんもそんなに心配してゐるし、きみさんは、自分で、氣を取り直して、養生しなさいやア不可ませんよ。」

「ハイ、モウキツト氣長く養生しますの。」

「それにね、きみさんと、一寸思ひ入れをしつ、

「一体此の病氣はね、吞氣に氣を持って、何處までも、平氣で養生してゐるとキツト癒るさうです。それは田澤博士もさう云つてゐますし、實例も澤山あるんですよ。」

ソレきみさんの知つてゐる、那の妾の處へチヨイ〜來てゐた、深山といふ人ね、

陸軍省へ雇はれてゐた、三十ばかりの、エ、さうく近眼のね、あの人が、ひどく

氣管を痛めてね。何でも二十歳位の時に、醫者も、モウみんな駄目だと云ふたさ

うですよ。ですけど、深山さんは、是非肺を直してやらうといふ考へで、スツカリ

世の中の事を忘れて了つたつもりで、何處か、房州の海岸へ行ツて一年ばかり、た

だ吞氣専門で暮らしたさうですよ。それが何うでせう、彼の通り効驗があつて、今

では、何處に病氣にある手とおもはれるやうなそんな體になつてゐるぢやアありま

せんか。」

「おや、彼の仁が、やつぱりさうでしたの。」

と、一道の光明が、今きみ子の眼前にひらめかんとした。

「さうですよ。那の仁ですよ。深山さんて、那の肥ツた仁が、一度は、氣管で醫者が、手を放したさうですよ。ですからね、今御自分に云ツてるんです、若し肺病に

罹ッた仁があつたら、僕が療法を教へてやる、其の療法といふのは、極くやさしいもので、唯だ世の中のうるさい事とは、全く縁を断つて了つて、呑氣にく暮せと云ふまでだ、なんてね、自分の経験から、さう云ツてるんですの。』

『だけどねえ伯母様。妻のやうなこんな體ぢやア、とても駄目でしょう。』
と、不安の念を挿はさむ。

『きみさんの體だツて。きみさんのでも、深山さんのでも、病氣の時は、變はりはありませんよ。いゝえ却ツてね、きみさんのやうに、平常から、可弱いものはこんな病氣にかゝつても、平常丈夫であつたものが、弱らされるほどには弱らないものですからね。柳に雪折れなしと云ふぢやアありませんか。伯母さんの體体だツて、こんなに瘡せてゐるんですけど、それでも、少々病氣をしても、すぐ折れて了ひさうにもありはしませんよ。ホ、ホ、』

『伯母様は、それは、お丈夫なんですもの』

『いゝえ、そんな事はありませんよ。これでね、一々氣を使ツてゐた日には、耐へ切れないから、無理にも平氣であるけれども、矢ッ張り弱くツてね、けれども、其の割合には、却ツて他の仁よりは長持がするかも知れないね。』

『エ、伯母様は、妾、ほんとにお羨ましいほど、お丈夫ですよ。妾たちのやうでは、到底駄目ですね。』
と、投げるやうに云ツた。

『又、そんな事を云ツて、きみさんは、すぐそれだから、いけないと云ふんですの。駄目か駄目でないとか言ふ事は考へないでね、何うしても、癒ッて見せなさいやア承知しないと云ふやうな氣でゐて下さいね。ね、きみさん。さうでなさいやア、切角癒らうとする病氣も益々重くなるんですの。きみさんが、そんな弱い事を云やア、伯母様はモウ知りませんよ。伯母様も、二郎さんも、満子さんも、みんなで辛配してゐるのは、一日も早う、きみさんを元の身体にして上げたいばかりですよ。』

と、云ツて、暫時きみ子の面を見入ツて、口を緘んで了つた。

きみ子は、今伯母の詞を聞いて、おもはず胸とゞろかしたのである。成るほど、伯母様と云ひ、二郎と云ひ、満さんと云ひ、みんなで自分の躰を辛配して呉れ、ばこそ、彼のやうに云ツて呉れるのである。其の厚い情けの程は、謝するにも餘りあるをおぼえるけれど、其の御恩に報ゆる事が出来るであらうか何う乎。

肺病は、死病である。到底永く生き存へる事は六ヶしかろう、一時はよくなるとも、又すぐ元に返ツて、自分は遂に血を吐いて死ぬべき運命を荷つたのである。伯母様の親切、二郎や満さんの心盡しの程はうれしいけれど……ア、おもへばそれも僅かの心休めに過ぎぬ。

「伯母様、ホントに濟みません」と、涙をすゝり乍ら、

「妾はね、何うでもして、キツト一度は、モウ一度ね、よくなり度いとおもひます。

の、皆様の御親切につけてもね、是非く癒つてお目にかけてやうとおもつてゐますの。』

「さうよ、きみさん。一日も早く、さうなつて貰はないと、妾たちの心づしくも水の泡ですよ。キツトさうなつて頂戴よ。エきみさん」

「エ、なりますとも、けれど、伯母様、又斯う云ツては、叱られるかも知れないんですけど、此の病氣では、モウ駄目だと、妾、疾ツくに、あきらめてゐますの、それも、躰が平常強い方なら、又快復の見込みもありませうけれど、妾のやうな可弱い質では、一度はよくなつても、とても永くは持てないでせう。さうおもふと、妾、何のやうに心掛けて、一旦はよくなつても、ヤツぱり又皆様に御辛配をおかけ申すんですもの。』

と、云ひさして、熱い涙にかきくれて泣いてゐる。
なる程、おもへば、きみ子の今の此の身体と云ひ、其の病氣と云ひ、たとへ一旦

は快くなるとも、やがて又此れが爲めに、消ぬべき露の命とは、伯母も亦必づいてゐるのである。であればこそ、見るからに哀れの催はされて、心の底には、血の涙を注いでゐる。が、出来る丈けは一度なりとも再び元の躰にしてやりたさが一杯で、さてこそ、勵ましてゐるのである。

今、きみ子が、斯う云ふのを聞くにつけ、ことはり切めて、あはれはいとゞまして来る。おぼえず、貰ひ泣きの涙に半巾を沾ぼしたのであるが、ハツト氣を取り直して、

「きみさん、モウどうぞね、此の伯母様を可愛さうとおもふなら、そんな心細い事は云はないでね、早く癒ッて安神さして頂戴ね。きみさん、妾の願ひですの。」

「……………」

きみ子は、たゞ泣いてゐる。

「ね、きみさん。心を大きく持つて、癒る病は兎も角としても、心静かに養生なさ

いね。さうすると、キツト快くなるんですから」

「伯母様すみません」

と、言ッて、きみ子は、尙ほシヤクリ上げながら、

「癒ッても、癒らなくツても、妾はね、モウそんな心細い事は考へないで養生しますの、何卒、安心して下さいまし。」

言ひ終ッて又せき上げた。伯母も半巾を把ッて面を掩はざるを得なかつた。

十四 空前の大戦

秋は過ぎ冬は去つて翌春には世は何となう騒がしう、號外の呼聲は一入驚しくなつて来た。中には早や國交斷絶、談判破裂など、傳へて大に國民を驚愕せしめたが、二月八日仁川沖の砲聲と共に、開は事實となつて表はれた、次いで十日宣戦の詔勅は愈々喚發せられ、敵艦全滅、砲臺占領等の快報紙々として傳はり、日東海國の民

は男も女も老も若きも一時に奮起し、提灯行列は催され、祝賀大會は開かれ國民歡呼の聲は四方に響き渡つて。殊に身を軍籍に置くものは、一日も早く滿洲の野に押し渡り、輝く旭の御旗を奉天城頭高く掲げんものと腕を扼して召集令狀の下るのを今や遅しと待つて居た。

日高大佐とても堂々たる帝國の一軍人、身は豫備役にあるものなれば、召集の數には漏れず、愈々二月も末の二十八日と言ふに、第〇〇聯隊に再び兵營生活を爲す事とはなつた。

軍人の身の素より斯くあるべしとは、兼ねて期しては居たが、いざ召集となりては又格別に何や彼やと思ひ出され、之れは斯くせよ彼れは斯うと、留守の事や將來の心得などいと細かに言ひ残し、殊に満子の事に就いては、深く戒め厚く諭じたのである。

去る程に日高大佐は中佐に昇進し、第〇軍第〇〇聯隊長として、三月二十日某地

に向つて愈々出征する事となつた。

夫の出陣、父の出征を送る爲めに、其出發の前々日即ち十八日の夕方日高家の奥座敷には門出の祝杯は舉げられたのである。此の目出度い祝宴に列るものは、大佐の親族の者の外に僅に友人二三名と親しく日高家に入出入する一商人とで此の名譽ある軍人を名譽ある戰場に送るには餘りに寂しく餘りに簡單で有つた。けれども世人は何故か之れを當然の事と言つて居た。

二郎も、親族の一人として、叔父の出征を祝ふべく、此の門出の筵に列なつて居たが、此の祝宴を見るにつけても、我が父君の變り無い世に在しまさば、今頃は曠ぞ勇ましく、數萬の人の祝ひの盃をも受け乍ら、馬上豊かに彼地に渡り天晴れ功名手柄して、世の人に鬼よ神よと稱へらる可きに、さは無くて世にも傷まじき毒手に懸れ未だに其犯人だに捕へ得ざるは何たる悲惨の極みぞと人知れず衣の袖を潤はしたのである。

某友人は祝杯を舉げて萬歳を三唱し、滿子は母の勧めにより琴をかなで、此行を
壯んにした。

翌々日の拂曉の、新橋發急行列車の車内に日高大佐の顔は見受けられた。

滿子は白の絹手巾を打ち振つて別れを惜しみ、二郎は萬歳を叫んだが、又故き父
の事など思ひ出してか、座る暗涙にむせんで居た。

顧りみれば、過ぐる二月の初め日露の間の事を構へてより、仁川沖の火花となり、
次いで旅順包圍攻撃となり、陸に海に皇軍の向ふ處敵無く、幾萬の兵士彼地に渡り
て、彈丸の的となり、或は陣中病を得て倒るゝあり、何れ悲惨の種ならぬは無い。
去る程に海軍は露軍を殲滅し、陸軍亦連戦連勝を奏し、某將軍の率ゆる第二軍は
南山に敵の主力を挫き、益々北進して得利寺の會戦となり尙ほも北部の露兵を擊退
せんとして居るのである。

第一軍は某將軍指揮の下に、鴨綠江岸の敵を破り、九連鳳凰城を拔き士氣大に振
ふて居る。

日高中佐は第二軍に附屬して、某方面の敵を擊退すべき命令を得て某地に向つて
活動を初めた。

「モウ海軍は浦鹽までも乗り込んだであらうね」と、色淺黒き精悍の一青年士官は大きな岩の影に座つて隣りの同僚士官を顧みた。

「いやまだそれ程にも行くまいよ」と、デップリと肥ふ太ッた少尉は受け答へた。

一行かないまでも、もう随分と花々敷い戦もしたのだから、而し我々陸軍はどうだ
未だ一度だつて戦争らしい戦争はした事はないではないか、早やく奉天まで押し進
んで、クロバトキンに一太刀なりとお見舞申し度い、噫脾肉の曠に堪えない。

「何、急いで事は仕損じる、男子宜しく悠々たる可しだハ、ハ、ハ」

と、横槍を入れたのは少壯の一士官だ。

「クロバトキンだつてもう袋の鼠だ、追ッ付け我々の前に両手を突いて胃を脱ぐだらうよハツハツハツ」

と、勇ましく笑つたのは丈長き一中尉だ。

折から一名の少尉は部下を率ひて歸つて来た。肥大少尉は振り返りて、

「どうだ、敵は逆襲でもしさうには無いか」と尋ねた。

「逆襲でもする程の勇氣が有れば少しは手應へがするが、要塞深く籠つて蠅一匹出ないとは何たる腰拔野郎だらうよ」

「腰拔野郎と言へば、日高聯隊長は實に驚くよ」と、丈長き中尉は言を挿み。

「此間だつて懸梁の中に隠れて指揮一ツしないではないか、今夜だつて又何處かへ、

御龍城だらうよ」

と、如何にも奮慨してゐる。

「さうだ、さうだ、實に軍人の面汚した、彼れには金の貴きあつて國の貴きは知ら無い奴だ、賣國奴だ」

「賣國奴の部下たるは實に男子の耻辱だ、彼れこそ蠻奴の刃に死すべき奴だ」

「彼れが敵刃に斃れる丈けの勇氣が有れば結構だ、まあ山でも崩れて岩に潰ぶされて往生するが關の山だ」

と、日高中佐に對する嘲罵の聲は四方に起つた。

中にも短氣な精悍士官は、今宵の夜陰に乗じて彼れを刺し殺すべきだと執園いてゐた。

「君は何かと言へば直ぐ暗殺だ、まあ少し辛抱したまへ、聽ては天の配劑で往生するだらうよ。何にも國の爲めだ、小事は論すべからず一番奮勵す可きだ、さあ又何

處かへ偵察に行かう」

と、一人が起てば、

「今宵は寝て敵の逆襲を待つとしようか」

「須らく寝て鋭氣を養ふ可した」。

と、勇ましく言ひ放つて各々其部署に向つて別れ去つたのである。

戦局は展げ、戦機は熟す、第二軍は大石橋を抜き析木城を得て益々北進を續行し、

八月二十五日遼陽城下の激戦に参加する事となつた。

敵は副防禦線を張つて我を阻止せんとし、我亦機に應じ時に乘じて神出鬼没の動

作を爲し、鐵條網に迫進し、敵に肉薄し、戦鬪數日に亘り古今未曾有の大戦は開か

れたのである。

九月二日晨星漸う光を失ふて曉色東より來る頃、砲戦四方に起り、猛烈なる突撃

の聲山岳を振るはし、彼我の死傷又算無く實に慘鼻の極に達した。

何時果つべしとも見えなかつた此の大戦も大勢は已に定まり、天鳴り地震ふ翌々

四日、さしも頑強なる敵も我軍の激烈なる砲火には抗すべくも非ずして、遂に城を

棄て、北方に遁走し、城頭高く旭旗は翻り、啾唳たる喇叭の聲諸共、天皇陛下の萬

歳は三唱せられたのである。

斯くて遼陽戦捷の報一度傳はりて、我國民は上下共に歡喜し、日比谷公園に祝賀

大會は開かれ、提灯行列は、催されたのである。

此の喜ぶべき祝すべきの日に際し、日高大佐の家はいと打ち濕りて笑ふ聲さへ聞

こゑなかつた。それも其筈だ、満子等母子は大佐の出發してよりは、只だ其の勇ま

しき消息を聞かんものと、毎日號外の呼聲を待ち詫びて居たのであるが、今日は満

子等母子にとりては實に悲しい報知が到達した日である。即ち日高大佐は遼陽の戦

に、戦死を遂げたので有る、名譽の戦死なら何も悲しむ事もあるまいが、此の公報

と共に一種の噂は傳播して來た。

負傷の爲め故國に後送された某軍人は左の如くに語つて居た。

日高大佐は〇〇聯隊長として彼地に出征したが、餘り戦闘には參加しないで、寧ろ塹壕の中に引き籠つて彈丸を避けて居た、それが爲めに部下よりは腰拔聯隊長と綽名されて居たのみならず、彼れは己れの地位を利用して官金を私し、種々偏頗な事が有つたが爲め、一時は非常な騒ぎともなつたが、故日高將軍と親しい某將軍は辯護の勞をとつて彼れを赦してやつたさうだ。

而し部下の將校兵士は、非常に彼れを嫌つて暗撃ちにせんかともまで奮激して居た。それだから此度の戦死も塹壕の中で味方の兵の爲めに刺されたのであるが、名譽の戦死者として傳へられただけでも、彼れの身の花だらうよ、而し故將軍の弟とは見られぬ程の憶病ものだ、腰拔だ。

うはさはこれであつた。日本帝國の軍人として、素より一人も此の様な腰抜け

武士のあるべき筈がない。

しかし火のないところには、烟の立たぬ道理、かう言ふうわさを傳へられるに至つたのも、ツマリは日高大佐が、常日頃、衆望を失なつてゐた證據である。

人のうわさは兎も角も、父と言ひ、夫と呼ばれる人の、今亡き人の數に入つたと聞いては、中佐一家の悲しみはほとんど想像に餘りあるのである。わけても、満子は、そのやさしい心に、たゞ父なつかしさの堪へ難く、寫眞を抱きて泣き入るのであつた。

親戚のたれ彼れ、さすがに此の報を得て、皆馳せ集まり、大佐亡き後をおもひやつて、悲嘆の涙にかきくれた。

二郎も、たとへ生前の行ひはいとはしかりしにせよ。今此の報を得ては、あはれを催さざるを得なかつた。